

# 明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報

第10号 2024年度

## 目次

### 写真家 小池 汪 氏追悼

写真家 小池 汪 氏を偲んで .....	山田 朗	1
小池 汪さんと歩んだ日々 .....	渡辺 賢二	2

### 第13回企画展「極秘機関『ヤマ機関』と登戸研究所

#### —日本陸軍の防諜とは ゾルゲ事件80年—」記録

講演会②「ゾルゲ事件についての最新の研究状況」 .....	加藤 哲郎	3
-------------------------------	-------	---

### 第14回企画展「日本が戦争になったとき—軍拡の時代と秘密戦—」記録

展示 .....	椎名 真帆	69
「『日本が戦争になったとき—軍拡の時代と秘密戦—』が よくわかる用語集」 .....	武田 美佳	105

#### 関連イベント①

企画展記念講演会「日本が戦争になったとき—軍拡の時代と秘密戦—」 .....	山田 朗	109
---	------	-----

2023年度年次報告 .....		149
------------------	--	-----

第13回企画展「極秘機関『ヤマ機関』と登戸研究所  
—日本陸軍の防諜とは ゾルゲ事件80年—」記録  
講演会②「ゾルゲ事件についての最新の研究状況」

加藤 哲郎

一橋大学名誉教授, 尾崎=ゾルゲ研究会代表

---

ご挨拶

山田 朗

明治大学平和教育登戸研究所資料館長, 明治大学教授

皆さまこんにちは。今回、企画展でゾルゲ事件について取り上げました。ゾルゲ事件について扱うのは当館では初めてなんですね。(2022年)12月にも講演会を開催しましたが(『館報』第9号収録)、今回はゾルゲ事件研究の最前線を皆さまにお伝えしたいと思い、今日は加藤哲郎先生にお越しいただきまして、ゾルゲ事件が今どのように世界で扱われているのかお話しいただきます。最近、ゾルゲ事件に関しての本も出ていまして、また新たに注目を浴びています。また、映画などゾルゲ作品も作られています。

登戸研究所とゾルゲ事件の関係というのは、登戸研究所にいる人がゾルゲを捕まえたということではないです。登戸研究所で開発した憲兵器材ですね、盗聴用の道具や電波がどこから出ているか測定する器具を登戸研究所が作っていて、(それがゾルゲ事件に関連します)。「ヤマ機関」という憲兵の特殊部隊のようなものがあり、それが(登戸研究所の器材を使ってゾルゲを追っていた)ということで、当館では登戸研究所と「ヤマ機関」、そしてゾルゲ事件を企画展で取り上げることにしました。防諜という部分は、当館では今までほとんど取り上げたことがなかったので、当時の「防諜週刊」というようなものにも(焦点をあて)展示をしていますので、よろしければ企画展をぜひご覧ください。

## ゾルゲ事件についての最新の研究状況：等身大の実像に迫る

加藤 哲郎

### 1. ゾルゲ事件をめぐる情報戦の現在

#### (1) はじめに——人工知能 (AI) でゾルゲ事件は解けるか？

##### ① はじめに——ゾルゲ事件は平凡社新書と「ネチズンカレッジ」で

こんにちは。加藤哲郎と申します。数年前まで早稲田大学大学院で教えておりました。その前 2010 年まで、一橋大学で政治学を 30 年間ほど講義していました。今日は、昨 2022 年にできたばかりの団体である「尾崎＝ゾルゲ研究会」の代表として、ゾルゲ事件についての世界の最新の研究状況をお話しさせていただきます。

強いて副題をつけるとすれば、私が 21 世紀に入ってゾルゲ事件の研究を始めた基本的立場ではありますが、「米国製『マスタースパイ』でも、ロシア製『大祖国戦争の英雄』でもなく、新資料に基づき、等身大のゾルゲと尾崎秀実<sup>ほつみ</sup>の実像を」と考えたのですが、長くなりますので省略形にしました。

私は政治学者として多くの著作を発表していますが、ゾルゲ事件についての単行本は『ゾルゲ事件——覆された神話』という平凡社新書 (2014 年) しか書いていません。しかしインターネット上では、1997 年の政治学者・丸山真男の一周忌に、学術サイトとしては大きな個人発信サイト「ネチズンカレッジ」(<http://netizen.html.xdomain.jp/home.html>) を立ち上げ、その学長兼事務員ということで、その「情報学研究科」のページに、ゾルゲ事件については 10 本以上の講演記録を収録しています。その他スターリン粛清と日本人犠牲者、戦前ドイツに留学した日本人の記録、関東軍 731 部隊・100 部隊の細菌戦、日本の社会主義と原爆・原発など多くの論文も、閲覧自由で公開しています。これらはすべてフリーで無料ですから、WEB 上でご覧いただければと思います。

##### ② ソ連がゾルゲの存在を初めて認めたのは 1964 年

今日のテーマは、ゾルゲ事件についての最新の研究状況です。先ほど今週出たばかりの本、オーウェン・マシューズ『ゾルゲ伝——スターリンのマスター・エージェント』(みすず書房, 2023 年) を紹介していただきました。これが英語圏での最新の研究状況を示す一冊です。このマシューズの本にも出てきますが、これまでのゾルゲ事件についての研究では、映画や小説もある役割を果たしてきました。その点で、今日の話には岸恵子さんの最近出た自伝や、世界

で初めて人工衛星から地球を見たガガーリンというソ連の宇宙飛行士の来日問題なども入れてお話しします。

1961年に岸恵子さんが主演した日仏合作映画、イヴ・シャンピ監督の『スパイ・ゾルゲ 真珠湾前夜』（1961年公開）が、フルシチョフ時代末期のソ連で初めてゾルゲの存在が認められるきっかけになりました。それまでゾルゲ事件は、冷戦と反共マッカーシズムのもとにあったアメリカで、ソ連が戦時中日本で行った謀略的なスパイ事件で、戦後も西側諸国で似たような情報収集や謀略を続けていると主張していたのに、ソ連側は、1964年までゾルゲの存在そのものを認めていなかったのです。アメリカの反共宣伝だといっていたのですが、突如1964年秋にリヒャルト・ゾルゲがソ連で名誉回復し、英雄に祭り上げられ、今日に至るのです。それによって、ソ連側からも資料が出てくるようになり、ようやく学術的な研究が可能になった。その現段階をお話するのが、今日の目的の一つです。

### ③ 「防疫と防諜」は戦前内務省の二本柱

2022年12月に山田館長より「防諜」という観点からの講演がありました<sup>(1)</sup>。防諜というのはスパイ対策ということです。この間三年間、皆さまコロナの問題に泣かされてきてなんとなく気が付いていらっしゃるかもしれませんが、実はスパイに対する「防諜」は、感染症に対する「防疫」体制と似た関係があります。

私は最近『戦争と医学』という医学雑誌に「戦前の防疫政策・優生思想と現代」という論文を寄稿しました（第22巻、2021年12月）。そこでは黒沢清監督の映画「スパイの妻」（2020年公開）で描かれたスパイ事件と満洲での731部隊細菌戦に即して、戦前は伝染病研究所・伝染病予防法による防疫と、治安警察法・治安維持法・国防保安法による防諜がワンセットになっていたことを論じました。

どちらも外国から危険なものが入ってくるのを妨げることです。防疫は感染症について、防諜は思想についてで、幸徳秋水等の大逆事件の時期に、山縣有朋が考えた天皇制確立のための方策でした。戦前の日本では、これが旧内務省の治安維持の二本柱でした。その伝統が、今日まで続いています。

## (2) AI・IT技術はどこまで現実の事件に迫れるか

### ① ChatGPTで「ゾルゲ事件」を聞いてみると

防疫と防諜が何らかの形で関係しているのではないかという問題を、試しにChatGPTに聞いてみましょう。テレビなどで観ていらっしゃると思いますが、人工知能AIを使ってどんな問題でも解いてくれるというコンピュータ・ソフトが出ています。インターネットでどんな問題でも無料で簡単に回答を得られるといえます。それが大学では、今大変な問題になっていま

す。課題のレポート作成に使われるのではないかと、教師たちの中で問題になっています。

今日はまずこれを使って、ゾルゲ事件に関しては ChatGPT は全く役に立たないことをお示しします。次いで、よく使われるのが Wikipedia というインターネット上の辞書にも誤りが多く、ゾルゲ事件についてはあまり役に立たないという問題をお話しして、では本当は何が問題なのかという話に入っていきます。

まず、ChatGPT に「防疫と防諜」について質問してみると、「防疫と防諜は一見すると関係なさそうに見えますが、実際には密接な関係があります」と答えてくれます。さらに「最近の COVID-19 (新型コロナウイルス) パンデミックのような状態は、国家は外部から感染源の侵入を阻止しますが、これは思想的な防諜活動を、つまりスパイ対策と非常に近い関係がある」と答えてくれます。ここまでは、なるほどいい答えです。

こういう一般的な問題についての ChatGPT は、使いがいがあります。若い官僚が定型文書を書く際や、企業の事務の人たちが企業間の商用文書を作る際には、非常に役に立ちます。これによって日本の労働のあり方が変わるだろうといわれますが、この点については、私もその通りだと思います。

ところが、ゾルゲ事件の内部に立ち入ってみますと、役に立ちません。例えば ChatGPT に「ゾルゲ事件とは何ですか?」と聞くと、「ゾルゲ事件とは 1930 年代に日本で発生したスパイ事件のことです」と、ここまでは学習してある。ところが「リヒャルト・ゾルゲというドイツ人ジャーナリストが、ソ連のスパイとして活動していた疑いがもたれ、1938 年に逮捕されました」と続きます。この「1938 年に逮捕」というのは誤りです。日米開戦直前、1941 年です。ところが、ChatGPT は、こういう嘘を平気でどんどん流すという特徴があります。だから、あまりお勧めできません。具体的な問題についての具体的な調査には、現在の、特に日本語で入力しての ChatGPT は、ほとんど使えません。

例えば「ゾルゲ事件における尾崎秀実の役割は何ですか?」と聞くと、「ゾルゲ事件とは日本のスパイ事件である」という定型回答に続いて、「尾崎秀実は当時の日本陸軍大臣であり、ゾルゲ事件においては、捜査に関わる重要な役割を果たしました」と出てくる。これは全くの逆で、尾崎秀実は、ゾルゲと一緒にソ連の諜報活動をしていた重要人物で、朝日新聞の元記者で近衛内閣の囑託でした。陸軍大臣とは全くの嘘で、捜査される側でした。

## ② 伊藤律についても見てきたような嘘の答えがスラスラと

ついでに、第一回の山田先生の講演会<sup>(2)</sup>の際に「伊藤<sup>りつ</sup>律という人物がゾルゲ事件にどのような役割を果たしたのか」という質問が参加者から出ていました。実は、伊藤律こそがゾルゲ事件が発覚する最初の糸口をつくった人物だという話が、1949 年の米国陸軍省のゾルゲ事件発表、いわゆるウィロビー報告以来、戦後長く流布してきました。

しかしこの20年ぐらいの研究で、それは米軍の冷戦用の謀略で、日本共産党内で伊藤律を失脚させるためのでっち上げだったことが分かってきました。伊藤律を「革命を売る男」と題した文藝春秋社の松本清張の『日本の黒い霧』（初出1960年）という本は、文庫本が2013年に文藝春秋社によって刷り直され、そこには松本清張が伊藤律について書いていることには事実ではないことが含まれているという「断り書き」が入ることになりました。

そういう人物について、ChatGPTがどう答えたかという、伊藤律は「1952年福岡生まれ、1975年京都大学法学部を卒業後、司法試験に合格し、弁護士となった」という全くでたらめの経歴情報です。恐らくこれは、誰かほかの、共産党の伊藤律とは関係はないがよく似た名前の個人の情報がすっと入り込んで、それで呼吸するように嘘をついた、これが現在、2023年4月段階でのChatGPTの特徴で限界です。

この種の歴史の問題では、皆さん騙されてはいけません。テレビでは何でも答えてくれると言っていますが、実は答えは正しくないだけでなく、正しくないことを受け取る側に意識させないように、平気でどんどん嘘をつくのです。つまり、フェイクニュースを連日垂れ流しています。くれぐれも注意していただきたいと、まずは申し上げておきます。

### ③ Wikipediaではどうか——尾崎秀実の逮捕日のズレ

ChatGPTよりも、もう少し使い勝手がいいのが、特に学生の間で普通に使われるウェブ辞書 Wikipedia です。Wikipediaは、「みんなで作る辞書」といわれて、どんな項目にも書く人とチェックする人がいて、確かなかなか参考になることがあります。試しに私の名前をグーグルに入れて検索していただきますと、同姓同名の元近鉄の野球選手が最初に出てくる（笑）。でもその次に「加藤哲郎（政治学者）」と出てきます。そこには、それほど間違っていない経歴と著作などが書いてあります。とんでもない間違いとかフェイクニュースは少ない。また、Wikipediaは各国語版で作られていて、それぞれの言語で記述の長さも評価も違い、比較すれば同一項目の各国語圏での理解の違いがいろいろと分かり、役に立ちます。

しかし、これもゾルゲ事件に限って言えば、必ずしも正確ではない情報がいっぱいあります。典型的には、日本語版で「尾崎秀実」と Wikipedia で引くと、2023年4月段階の閲覧では「尾崎秀実は1941年10月15日にゾルゲ事件の首謀者の一人として逮捕された」と出てくる。ところが「ゾルゲ諜報団」とか「ゾルゲ事件」の名義で Wikipedia を引くと、尾崎秀実は「10月14日に自宅で逮捕された」と出てきます。つまり、同じ辞書の中で、逮捕日が一日違います。「ゾルゲ事件」という項目では、大審院が尾崎は近衛内閣の重要人物であるからそう簡単には逮捕できないということで、まず10月14日に尾崎秀実の逮捕が行われ、それから10月18日にゾルゲほか外国人へと拡げた、と出てくる。これによって Wikipedia の「尾崎秀実」の項とは、逮捕日が一日ずれているのです。

#### ④ 西園寺公一と犬養健の検挙は 1942 年で、治安維持法ではなく国防保安法違反だった

その他にもありまして、やはりゾルゲ事件の容疑者であった「犬養健」という人物の項目の「年譜」には、2023 年 4 月段階の閲覧で「1941 年にゾルゲ事件への関与容疑で拘引され、警察当局の取り調べを受け」たとあるのですが、これも不正確です。さらに尾崎秀実の友人である西園寺公一さいおんじ きんかずという元老家の御曹司も関わっていたので、「ゾルゲと尾崎、西園寺らの逮捕によってゾルゲ事件が発覚し、次々と逮捕者が出た」とあります。

しかし実は、皇室に近い貴族の出であった西園寺公一と犬養健は、尾崎秀実、ゾルゲら主要人物が逮捕されてから半年以上後の、1942 年 3 月以降に検挙されます。ですから、この Wikipedia の記事を書いている著者は、当時の警察・検察記録をよく見ていない。当時は、貴族の息子を簡単に特高警察が尋問することはできないのです。西園寺と犬養は、特高警察ではなく検察官に取り調べを受けます。司法省思想検察のエリート検察官は、100 人ぐらいしかいませんでした。当時 1 万人近くいた特高警察は、共産党員やその周辺の思想犯を治安維持法で捕まえることはできたけれども、元老家の西園寺公一や元首相犬養毅の息子である犬養健の二人については、尾崎の友人であることは分かっていたけれども、正式に尋問して共産主義者として検挙するのは困難で、事件が発覚し日米戦争も始まった後、1942 年の尾崎秀実の訊問で、天皇列席の御前会議での国家機密漏洩という国防保安法違反の重大犯罪が分かり、ようやく半年後に検挙されたのです。そういう問題が、Wikipedia では誤って書かれています（ただし、2024 年 7 月段階の閲覧では、犬養健「年譜」の「1941 年勾引」は残されていますが、「ゾルゲと尾崎、西園寺らの逮捕」の一文は消され修正されています）。

### (3) 世界からの新資料によるゾルゲ事件の再検討

#### ① プーチンによるロシアの「愛国者ゾルゲ・ブーム」は戦争準備の一環だった

今日は、ゾルゲ事件についての資料や事実が新しくなっていることをお話しします。21 世紀になって新資料が出てきて、初めて第二次世界大戦中の史実がいくつか明らかになっているという、この事件の特徴をお話しします。

一つのポイントは、いまなぜ尾崎＝ゾルゲ研究なのかということです。今日のロシアの大統領であるプーチンは、少年の時に愛国者ゾルゲを知り憧れていたと、2020 年にロシアのタス通信がニュースにしました。ゾルゲについての映画を観て、自分はゾルゲみたいな人物になりたいと思ったといいます。

そのプーチンが、2022 年 2 月からウクライナへの侵略戦争を続けています。ウクライナ戦争の問題とゾルゲ事件は、少なくともロシアでは、リンクしています。プーチンによるゾルゲの歴史的再評価が、今日ロシアである種の「ゾルゲ・ブーム」を生み出しているのです。

次に資料公開があります。ゾルゲがヒトラーとの戦争で勝利した「大祖国戦争の英雄」と呼

ばれる愛国者であったと宣伝するだけでなく、ゾルゲに関する新資料が、いろいろ出てきました。ゾルゲが上海及び東京からモスクワに送った電報の原文は、これまではごく一部しか公開されていなかったのですが、全貌が明らかになってきました。これは学術研究としては、歓迎すべきことです。

## ② ズルゲがモスクワに送った情報は 650 点に及んだ

後でもお話ししますが、日本側が 1941 年 10 月にゾルゲを逮捕した際に、自宅に残されていたのは、ソ連に送る予定の電文の暗号で書かれた下書きくらいでした。その後の警察・検察の訊問でゾルゲから聞き出した内容が、これまでゾルゲ諜報団のスパイ活動だといわれてきました。当時の日本側警察の推定では、およそ在日 8 年間に 400 通の電報が打たれただろうとされています。

ところが実際にゾルゲがモスクワに送った情報、何が届いていたかについては、ほとんど分かりませんでした。どれだけあり、どんな内容であったか、それはスターリンにまで届いたかは、20 世紀には、ほとんど分からなかったのです。

それが 21 世紀になって、650 点もの電報の原文が出てきました。元在日ロシア大使館文化アタッシュエであったアンドレイ・フェシュンによって編まれた資料集に公表され、日本でも『ゾルゲ・ファイル 1941 - 45 赤軍情報本部機密文書——新資料が語るゾルゲ事件 1』（みすず書房、2022 年）という本になりました。ロシア語の原文は約 650 点入っているのですが、そのうちの 218 点が 1941 年以降のものなので、日本語版は、さしあたりその 218 点を翻訳したものです（名越健郎・名越洋子訳）。

それまで日本側は、特高警察・検察の訊問記録から、ゾルゲはソ連に 400 通くらい出していただろうと推測していたのですが、1964 年のソ連でのゾルゲ復権・名誉回復の際に、ゾルゲが東京から英雄的に送ったという、ソ連にとって有益ないくつかの電文が公開されましたが、せいぜい数十通でした。1991 年にソ連が崩壊した際に、NHK 取材班がモスクワに出かけて、約 90 通の電文が、追加的に公表されました。その後、ロシアの公文書館での文書の公開が進み、上海及び東京からゾルゲが実際に送った通信が 650 通もあることが分かりました。

その新しく公開された資料を見ると、これまで知られていなかった、いろいろな問題が見えてきました。

## ③ ズルゲ事件はスパイ物語から現代史の学術研究の対象になった

これを跡付けるために、ここでゾルゲ事件の実証的研究という問題を提起します。

いわゆるスパイ物語とは違った学術的研究は、ソ連（ロシア）、日本、アメリカ、イギリス、ドイツ、中国などで進んできましたが、これまでのゾルゲ事件研究の世界的な定番となっ



たのは、主に英語で書かれた実証的歴史書です。

一つは、ディーキンとストーリィというイギリスの歴史学者たちが書きました『ゾルゲ追跡』（フレデリック・ウィリアム・ディーキン / G.R. ストーリィ 『ゾルゲ追跡——リヒアルト・ゾルゲの時代と生涯』 筑摩書房, 1967年, 筑摩叢書, 1980年, 岩波現代文庫, 2003年）という先駆的な本です。ナチス崩壊時に見つかった在独日本大使館文書や、在日ドイツ大使館でのゾルゲの役割が分かるドイツ本国との連絡文書なども使われていて、ウイロビー報告など米国陸軍省文書より事件の歴史的背景が深く検討されています。

次いで、ローバート・ワイマントという『ザ・ガーディアン』紙などのジャーナリストが編年体で書いた、日本では新潮社から出ている『ゾルゲ——引き裂かれたスパイ』（1996年）で、世界的なベストセラーになりました。編年体で書かれているために、世界各国での動きが各年毎に分かり、第二次世界大戦とゾルゲ情報のつながりが見えてきます。

そうした流れを汲んで、ワイマントの本から20年以上経って、21世紀に入ってから旧ソ連・ロシア側の新公開資料をも用いて作られた新しい英語の本が、愛知大学の鈴木規夫教授と私が翻訳して出したばかりのオーウェン・マシューズ『ゾルゲ伝——スターリンのマスター・エージェント』（みすず書房, 2023年, 原書は Owen Matthews, *An Impeccable Spy: Richard Sorge, Stalin's Master Agent*, Bloomsbury Publishing, 2019）です。

これらに先に述べたロシアでのフェシュン編『ゾルゲ・ファイル』や翻訳準備中のアレクセイ・エフの大部の研究を加えると、ゾルゲ事件の全体像を本格的に研究できる文献・資料が、ようやく出揃ってきました。

#### （4）戦後日本のゾルゲ事件イメージ——「反戦平和の尾崎たち」から「赤色スパイ団」へ

##### ① 尾崎秀実『愛情はふる星のごとく』の「愛国者」から米国陸軍省報告の「赤色スパイ」へ

戦後から1950年代にかけて、日本で知られていたのは、1944年11月7日に、ゾルゲと一緒に死刑になった尾崎秀実が家族に宛てた獄中からの書簡を、松本慎一ら尾崎秀実の友人たちが編んだ書簡集『愛情はふる星のごとく——獄中通信』（世界評論社, 1946年, 後に岩波現代文庫, 2003年など）です。戦後の一時期1946 - 47年頃、戦後民主主義の生まれる中でベストセラーになりました。

尾崎秀実の活動は、家族への愛情に満ちていただけではなく、天皇制日本の軍部の戦争強行に反対するものだった。反ファシズムの連合国である社会主義ソ連に情報を流した行為は、日本を愛するが故の愛国者としての行動だった、ゾルゲ諜報団全体が世界平和を願った反戦グループであったと、非軍事化・民主化・新憲法制定の嵐の中で、肯定的に評価されていました。

しかし、1949年のいわゆる「逆コース」の頃から、流れが変わります。「独裁者スターリン

の指導するソ連の赤色スパイ団」というイメージに、書き換えられるのです。決定的だったのは、日本を占領したアメリカ軍が、戦前日本の特高警察による治安維持の取り締まり記録を収集し、恣意的に利用できる資料を編集してゾルゲたちを「国際赤色スパイ団」として公表した、1949年2月の米国陸軍省報告、いわゆるウィロビー報告です。

## ② 背景に東西冷戦と中国革命、米国内「赤狩り」と日本民主化「逆コース」

背景には、東西冷戦の激化がありました。ちょうど中国内戦で毛沢東の中国共産党が蒋介石の国民党を台湾に追いやり、ヨーロッパでは英米仏ソの連合国が共同支配していたドイツが東西に分裂国家を作る時期です。米国内での「赤狩り」マッカーシズムが、ハリウッドの映画関係者などからすでに始まっており、戦前日本の権力の中枢に共産主義ソ連のスパイがいてソ連に重要な情報を流していたゾルゲ事件の事例は、国務省などアメリカの政府中枢にもソ連がスパイを送り込んでいるに違いない、と信じさせるに十分でした。

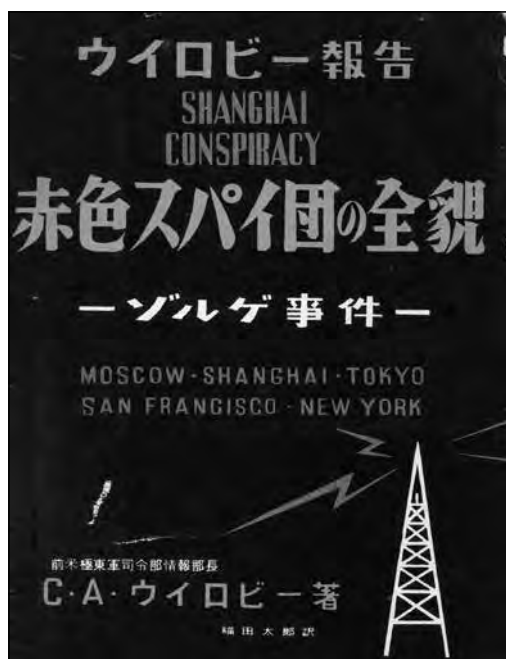
戦前日本のゾルゲ・スパイ団は、日本では御前会議という天皇列席の会議の国家機密情報までモスクワに送っていたのですから、その延長上で世界中に戦後もスパイはいるはずだと思います。冷戦期に日本を占領していたアメリカ軍は、1949年にはソ連や中国共産党と対峙していました。アメリカ国務省の中にも、あるいは世界各国のアメリカ大使館の中にも、共産主義スパイがいる可能性があるという警告するために、日本の戦前のゾルゲ事件を使ったのです。

## ③ 米軍ウィロビー報告から生まれた尾崎秀樹の「伊藤律＝生きているユダ」説

その米国側ウィロビー報告の世界的情報操作に乗ったのが、日本では、尾崎秀樹という尾崎秀実の腹違いの弟で、後に文芸評論家として著名になる人物です。彼と、川合貞吉という中国で尾崎秀実のもとで活動したことがある元大陸浪人が、ウィロビー報告など米国側調査情報をそのまま真に受けて、ゾルゲ事件が発覚する発端となったのは、占領期に徳田球一書記長と一緒に日本の共産党を指導し農民部長をしていた伊藤律という共産主義者だ、と決めつけました。戦前に伊藤律が警察に捕まった時に、尾崎秀実やゾルゲ機関のことを特高警察が調べるきっかけになる情報を与えた、というのです。

それをもとに、尾崎秀樹は「生きているユダ」、つまりイエス・キリストを売ったユダのような裏切り者が共産主義運動の中において、その情報提供でゾルゲ事件が発覚して腹違いの兄尾崎秀実が死刑になった、そういうスパイ事件として米国から宣伝された尾崎秀樹は、その「裏切り者」伊藤律が、いまや徳田球一の片腕として戦後の日本共産党を動かしていると告発します。

当時の日本共産党は、一応否定しましたが、以後、ゾルゲ事件について公式には発言しなくなりました。他方で、党内では疑心暗鬼が生まれ、伊藤律を監視し、朝鮮戦争を契機に秘かに



第1図 『赤色スパイ団の全貌 ゾルゲ事件』表紙

中国に渡った党最高幹部たちの北京機関が、徳田球一が病気で伊藤律をかばいきれなくなった段階で野坂参三などにより「裏切り者」と断罪され、中国共産党の管理する監獄に引き渡されるのです。

④ ウイロビー報告のもう一つの狙いはスメドレー、スノー、ストロングの「非米活動」証明 ウイロビー報告のもう一つの狙いは、チャールズ・ウィロビー著、福田太郎訳『赤色スパイ団の全貌 ゾルゲ事件』（東西南北社、1953年）のもとになったウィロビーの最終報告書の原題が『上海の陰謀』（Willoughby, Charles Andrew, *Shanghai Conspiracy: The Sorge Spy Ring*,

*Moscow, Shanghai, Tokyo, San Francisco, New York, New York*, 1952)であったように、戦前から中国大陸に渡り、中国共産党の農民革命に共感し賛同した米国人ジャーナリストたちを、売国「非米スパイ」として告発することでした。毛沢東の伝記『中国の赤い星』（宇佐美誠次郎、杉本俊朗訳、永美書房、1946年など）を書いたエドガー・スノー、中国革命のニュースを送るアンナ・ルイーザ・ストロングと共に、1930 - 33年はゾルゲや尾崎と上海時代に親しく、その後も八路軍の長征に従軍してルポルタージュを送り続けたアグネス・スメドレーを、ゾルゲ諜報団のスパイと断定して、米国民に共産主義の恐ろしさを警告しました。

スメドレーは直ちに米陸軍に抗議し、いったんは「米国共産党員」容疑は撤回されますが、1950年に米国下院非米活動委員会の召喚を受けてイギリスに渡り、そのまま病死してしまいます。そのため、既にゾルゲと尾崎は1944年に処刑され、スメドレーもいなくなって、上海時代のゾルゲ諜報団の事情を知るのは、彼らと親しかったと自称する川合貞吉だということになりました。

この時川合貞吉は、実はアメリカのスパイになっていたのですが、川合貞吉『ある革命家の回想』（日本出版共同、1953年、後に新人物往来社、1973年、谷沢書房、1983年など）は、ゾルゲの愛人と称する石井花子の『人間ゾルゲ』（日新書店、1949年、執筆名義は三宅華子、後に石井花子名義で鱒書房、1956年など）、尾崎秀樹の『生きているユダ』（八雲書店、1959年など）と共に、ウィロビー報告によって描かれた「赤色スパイ事件」としてのゾルゲ事件の物語を日本の読者に提供する、格好の読物となりました。

⑤ 川合貞吉や尾崎秀樹に寄せられた松本清張の「革命を売る男 伊藤律」断罪

こうした米軍ウィロビー報告と川合貞吉、尾崎秀樹などによって作られたスパイ物語に乗ったのが、日本の推理小説の国民作家・松本清張です。

松本清張の場合は、戦前に伊藤律がゾルゲ事件の糸口を特高警察にばらして尾崎秀実らを「売った」という尾崎秀樹の「生きているユダ」ばかりではなく、戦後占領期の伊藤律の華々しい活動についても、米軍に秘かに通じた「革命を売る男」だったという話に、仕立て上げます。伊藤律は戦後日本共産党の大幹部でありながら、共産党の情報をアメリカに流してスパイをしていたというのです。これは、1960年安保闘争さなかの野坂参三・宮本顕治ら日本共産党指導部の「北京機関」についての一方的説明を、鵜呑みにしたものです。

1950年に始まる朝鮮戦争の時期に、日本共産党の指導部は北京に逃れて国内での武装闘争を指揮し、党そのものも主流派＝所感派と反主流派＝国際派に分裂しましたが、徳田球一・野坂参三ら主流派が支配的な北京機関で、伊藤律はゾルゲ事件についても査問・追及されて、徳田の病死後に「除名」され、中国で「行方不明」になりました。

実際は日本共産党から中国共産党に身柄が引き渡され、伊藤律は、1980年の帰国まで中国の監獄に幽閉されるのですが、そのことが1980年に判明する前の「消息不明」の段階で、日本共産党の非主流派・宮本顕治らに政治的に近かった松本清張は、『日本の黒い霧』の一部として「革命を売る男 伊藤律」を書き、映画や文学をも介した「赤色スパイ物語」を大衆文化として広める役割を果たすのです。

こういう「赤色スパイ」であるばかりでなく、伊藤律の「革命を売る男」「生きているユダ」というような「裏切り者」イメージが1950年代に作られ、1960年代以降も、一般によく知られたスパイ物語になっていきます。

(5) 伊藤律発覚端緒説との訣別を——覆される通説もありうる

① 1960年代に始まるゾルゲ事件の学術的研究、みすず書房『現代史資料』刊行

そうした米軍ウィロビー報告を下敷きにした「赤色スパイ物語」が、学術研究によってただされる端緒が、1960年代です。私はそれまでの、1950年代のウィロビー報告によって作られ、尾崎秀樹や松本清張にとって広められたイメージを「大衆文化としてのスパイ物語」ということにして、「学術研究の対象としてのゾルゲ事件」とは区別するようにしています。

1960年代になると、先ほど触れた岸恵子の映画などによって、ソ連がゾルゲの存在を認め「大祖国戦争の英雄」と評価するようになります。もう一つ、1962年から日本でみすず書房の『現代史資料』という日本の警察・裁判記録が公刊されます。この『現代史資料』シリーズは、全部で40巻以上ありますが、その第1回配本が、1962年8月の『現代史資料 第1——ゾルゲ事件1』でした。その年に1-3巻が出ています。補巻の第4巻が配本されたのは1971年です。

これは、かつて国家権力中枢の内部でのみ配布していた特高警察の取り締まり・検挙・訊問資料、非公開の裁判資料をまとめたもので、分厚い日本語資料です。

歴史資料としては、被告たちの警察・検察での供述調書が詳しく入っていて、貴重なものです。これは、発売されてすぐに、日本の歴史学の研究者たちから歓迎されるものとなりました。

② 木下順二「オットーと呼ばれる日本人」は『現代史資料』刊行直前の日本の問題提起

なお、そのはざまの『現代史資料』第1巻刊行直前の1962年7月から、木下順二の戯曲「オットーと呼ばれる日本人」が初演されています。

木下順二の戯曲は、尾崎秀樹や松本清張とはやや違って、ウィロビー報告や伊藤律には直接触れません。敗戦直後の尾崎秀実の書簡集『愛情はふる星のごとく』に立ち戻って、国際的にはゾルゲの「第2バイオリン」である尾崎秀実に焦点をあて、史劇の主人公にします。ウィロビー報告以来日本での争点として浮上した、尾崎秀実は果たして愛国者だったのか、それとも祖国を売った裏切り者・売国奴であったのかという問題に真正面から取り組んだという意味で、今日的にも価値があります。

何よりも、書かれたのは、日米安保条約反対運動の高揚から挫折の時期です。売国的と言われた岸内閣の日米安保条約改定強行に、空前絶後の国民的反対運動があった時期です。尾崎秀実が日中戦争期に苦悩した自分の祖国とは何か、国策に反対することは裏切りなのかという問いと苦悩を、当時の新劇人をはじめ多くの若者たちが体験できました。

尾崎秀実を「オットーと呼ばれる日本人」と題して、自立した個人にとっての「愛国とは何か」を直接的に戯曲にしたのは、日本共産党の「非転向」幹部とされた「亡命16年」野坂参三と「獄中12年」の宮本顕治により、日本共産党が新しい綱領で再建される時期に重なります。中ソ論争もまだ知られておらず、原水禁運動や平和運動も分裂前でした。宇宙飛行まで実現させた社会主義ソ連が歓迎される理由もあったでしょう。

ただし、今日の学術研究からすると、開幕冒頭の上海時代のゾルゲ・尾崎・スメドレー宅での秘密会合は、ウィロビー報告を受けた川合貞吉の回想に依拠していて、史実としては誤っています。

ごく最近出た、山本武利『検閲官——発見された日本人名簿』（新潮新書、2022年）は、敗戦後の日本国内で私人間の手紙・電話などあらゆるコミュニケーションを監視し検閲した「GHQ 検閲官」の日本人高級幹部の英文資料リストに「Kinoshita Jenji」が入っていたことを明みにしました。当時の日本で最も英語能力の高かった日本人の一人である木下順二が、山本安江「夕鶴」などの演劇活動を支えるためにも、高給の保証された日本「民主化」のための米軍検閲活動に従事していたのではないかと問題提起されています。未来社編集部証言など、傍証からもまちがいないと思われまふ。当時はサルトルの実存主義の流行期です。「オットー

と呼ばれる日本人」は、占領期に日本人の二重性を体験した自分自身の実存的体験を、尾崎秀実の苦悩の台詞に投影していたとも考えられます。

### ③ 『昭和史』論争から「人間の描かれる現代史」へ

1950年代の日本では、歴史学界で昭和史論争というのがありました。遠山茂樹・藤原彰・今井清一共著の『昭和史』（岩波新書、1955年）について、亀井勝一郎らが「人間が描かれていない」と批判したもので、歴史学者や文学関係者を含め、唯物史観と現代史、客観的な歴史記述と国民の歴史認識・歴史教育をめぐる、大きな学問的・文化的論争になりました。

その『昭和史』の著者の一人である藤原彰さん（1922年－2003年）が、1962年8月に刊行された『現代史資料 第1——ゾルゲ事件1』の書評を、『歴史学研究』という歴史学研究会機関誌の1963年4月号に書きます。そこで、「スパイ」とか「裏切り者」とかが問題になっていたゾルゲ事件が、特高警察の訊問や裁判所の事実認定など第一次資料が発表されて、現代史研究の重要な研究対象になった、と評価したのです。藤原さんは、一橋大学の政治学の私の前任者で同僚でした。

『昭和史』のもう一人の著者今井清一さん（1924年－2020年）は、死刑に処された尾崎秀実の娘婿でもありました。当事者としての事件についての発言は多くはありませんが、義父の『尾崎秀実著作集』全5巻ほか尾崎秀実の学術研究を後世に残す収集・編集の中心になりました。

こういうかたちで日本でも、一方ではスパイとか東西対立の映画とか大衆文化風物語が続きますけれども、他方で研究者やジャーナリストも、歴史的・学術的にゾルゲ事件をみるようになってきました。

### ④ 「尾崎＝ゾルゲ研究会」でゾルゲ事件の学術研究の伝統を引き継ぐ

詳しくはこれから追いかけていくのですが、昨2022年に、私たちは「尾崎＝ゾルゲ研究会（OS研）」を立ち上げて、学術研究としてのゾルゲ事件研究を再興することにしました。同時に、みずず書房から新しいゾルゲ事件の資料集ほか基本文献を刊行していきます。

フェッション『ゾルゲ・ファイル』もマッシュューズ『ゾルゲ伝』も5千円以上の高価な本になって恐縮しているのですが、本格的にゾルゲ事件を研究しようとする、どうしてもそれぐらいの分量が必要になります。

皆さまのお手元の資料にも研究会の様子を入れてありますので、後で見ただければと思います。事務局は、愛知大学の鈴木規夫教授の研究室に置いています。名古屋の愛知大学がなぜ、と思われるかもしれませんが、愛知大学は、かつて上海にあった東亜同文書院の後継教育機関です。かつて近衛家が上海に作った、日本人と中国人が一緒に中国について学ぶ学校の、いわば末裔です。東亜同文書院の伝統と資料が、そのまま愛知大学に受け継がれています。

その東亜同文書院は、ゾルゲ事件とも深い関係があります。1930年代初めの上海でのゾルゲ諜報団の活動の末端に、東亜同文書院の日本人・中国人学生がいて、朝日新聞上海支局の尾崎秀実の活動にも協力していました。中西功・西里龍夫・安斎庫二ほか、尾崎秀実とゆかりのある共産主義者も多く輩出しています。

愛知大学には、ゾルゲ事件の中国上海時代の関係資料があり、その研究が続けられています。

私たちの尾崎＝ゾルゲ研究会は、日露歴史研究センターの資料や国際ネットワークを受け継いで、「尾崎＝ゾルゲ文庫」も立ち上げました（「ゾルゲ事件研究深化、愛知大文庫開設を計画 寄贈資料すでに1000点」『中日新聞』2023年7月27日）。

先ほどご紹介したみずす書房の『新資料が語るゾルゲ事件』シリーズは、全4巻を予定していて、これまでに2冊刊行され、これから愛知大学・鈴木規夫教授の尾崎秀実論、それにロシアのアレクセーエフによる上海時代のゾルゲ諜報団の研究の刊行が予定されています。

## 2. いま、なぜ、ゾルゲ事件の再考か

### (1) プーチンのロシアにおける「愛国者」ゾルゲ・ブーム

#### ① 石井花子をヒロインにしたロシア映画「スパイを愛した女たち」は日本でも上映

プーチンが若いときにゾルゲに憧れたという記事が、2020年、タス通信のインタビューで発表されました。自分は高校生の頃、映画で見たゾルゲのようなスパイになりたかった。旧ソ連の秘密警察 KGB への就職を志望した動機にそれがあつた、と言ったそうです。この前後に、いろんなゾルゲものがロシアでは出ています。研究書も、今回私たちが翻訳準備しているのは2冊のみですが、ほかにもいくつか出ています。

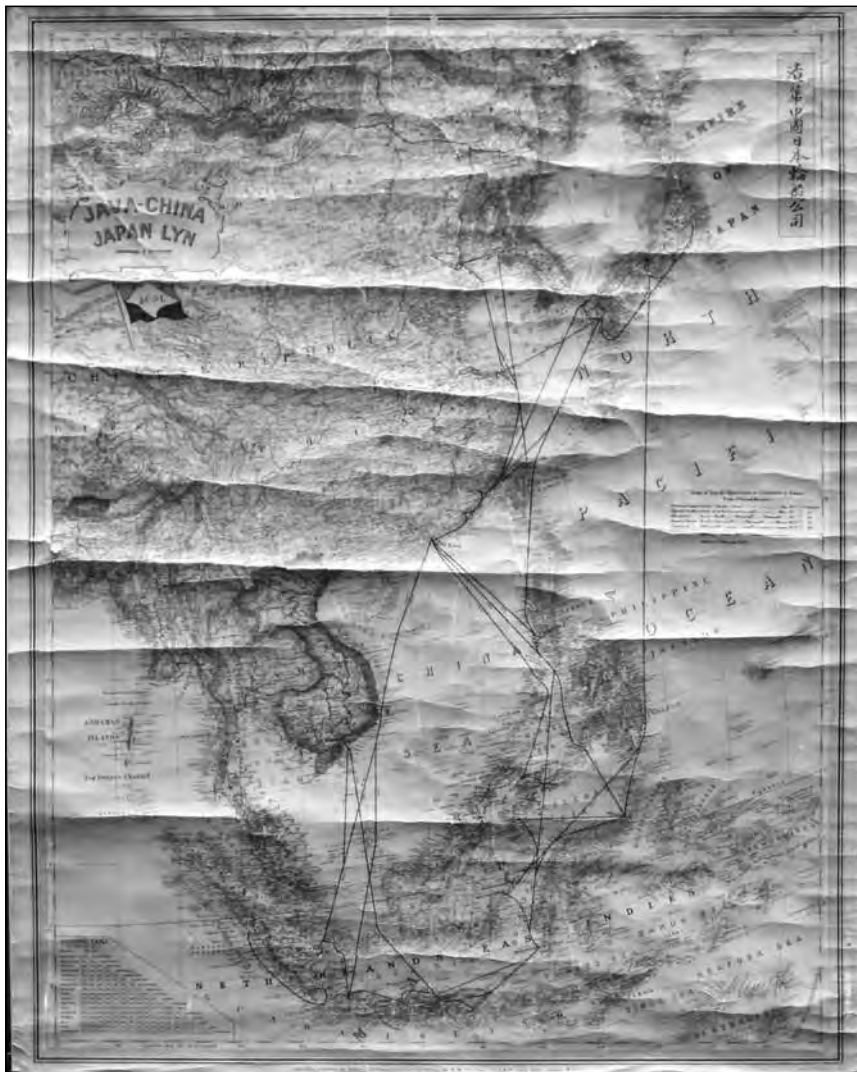
そのプーチン由来の「愛国者ゾルゲ」ブームの中で、ゾルゲの半生を描く映画がロシアで作られ、2018年から2019年にかけて「スパイを愛した女たち——リヒアルト・ゾルゲ」というタイトルで、テレビで放映されました。日本で言えば大河ドラマにあたるもので、全12話の連続テレビドラマとして放映されました。それが日本人用に一本の映画になって、2023年2月にはロシア大使館で試写会が行われました。ウクライナ戦争のさなかです。東京や名古屋の映画館でも試写会が行われ、上映されました（「土曜訪問 加藤哲郎：プーチン氏の原点は、ゾルゲ研究からウクライナ侵攻へ」『東京新聞』2023年6月3日）。

「スパイ・ゾルゲを巡る女たち」という感じの映画で、主人公は、石井花子というゾルゲの東京時代の恋人といわれた銀座のバーの女給です。その石井花子が、多磨霊園にゾルゲの墓を作った。それが現代のロシアでドラマになっている。しかも、石井花子が作ったゾルゲの墓が、石井家のご遺族がもう維持できないということで、現在の在日ロシア大使館が、その管理権を

ご遺族から買い取って、多磨霊園にあるゾルゲや被告たちを祀るお墓は、ロシア大使館の管理するものになっています（「露大使館がゾルゲの墓の使用権取得へ 相続人と承継で合意」『毎日新聞』2020年12月25日）。

毎年11月7日のゾルゲの命日には、そこで大きな慰霊祭が、在日ロシア大使以下関係者が集まってやっています。（「【リヒャルト・ゾルゲ】在日ロシア大使館外交官ら 戦勝記念日に合わせて『ソ連邦の英雄』ゾルゲの墓参り」日テレニュースNNN, 2020年5月6日 [https://www.youtube.com/watch?v=mhamPOzfS\\_Y](https://www.youtube.com/watch?v=mhamPOzfS_Y)）。

## ② ゾルゲ検挙時押収されたアジア地図はロシアに



第2図 ゾルゲが捕まった際に部屋の壁にあった地図（筆者撮影）

お墓の件とは別に、ゾルゲが捕まった時に、部屋の壁に飾ってあった地図があります（第2図）。これは、もともと日露歴史研究センターが入手したもので、2年間ぐらひは私の一橋大学の研究室に鑑定用に置いてありました。これが今、ロシアに渡って、国防省の諜報機関GRU（赤軍参謀本部情報局）の博物館に、ゾルゲの遺品として飾られています。

写真のようなアジアの地図です。ゾルゲが毎日毎晩これを見なが

ら、日本ばかりでなく、アジア各地でいろんな諜報活動をやっていたということが分かる地図で、面白いのでいろいろ分析しました。結局これは、当時のオランダの船会社が作ったものであることが分かりましたが、ゾルゲの諜報活動の範囲は日本だけではない。中国大陸全体から東南アジアまで視野においていたことが分ります。



地図上にいろんな線が引いてあって、日本の中で一番大きく扱われている港は、横浜でも神戸でもなく、九州の「三池」とあります。三池炭鉱の積み出し港です。そこから太い線の航路が中国まで出ている。さらに石油が出るインドネシアともつながっている。日本の石炭がどのように流通しているのかを含む、当時の資源やエネルギーの流れを分析した地図だということが分かっています。これはソ連で貴重な資料とされているようです（「スパイ・ゾルゲの顕彰盛んに ロシア ゆかりの地図，国防省へ」『東京新聞』2019年11月29日）。

### ③ ゾルゲ諜報団研究の現在の到達点——アレクセーエフの3巻本

こうした21世紀ロシアの「第2のゾルゲ・ブーム」の中で、恐らく最も重要な学術的研究は、私たち尾崎＝ゾルゲ研究会が、現在日本語に翻訳中の、ミハイル・アレクセーエフというロシアの軍事史学者の本です。

上海編にあたる『貴方のラムゼイ——リヒアルト・ゾルゲと中国におけるソ連の軍事情報 1930 - 1933年』、東京編は2冊に分かれ『貴方に忠実なラムゼイ——ゾルゲと日本におけるソ連軍事情報 1933 - 1938年』『貴方に忠実なラムゼイ——リヒアルト・ゾルゲと日本におけるソ連の軍事情報 1939 - 1941年』という、それぞれがロシア語で700頁前後の分厚い3部作です。

これによって、ゾルゲの生涯、ゾルゲ諜報団の中国と日本での活動について、ロシア国防省中央文書館の公文書（フェシユンの編んだ650通の電文など）に基づいて、ほぼ全貌が明らかにされました。現在吉田臣吾さんが翻訳中の上海編だけでも、新しいことがいろいろ分かっているのですが、それは、これからのお楽しみということにしましょう。

## (2) 資料公開——米日官憲資料とロシア交信資料 650件

### ① 日露歴史研究センターの業績を引き継ぐ

日本で2010年代まで、ゾルゲ事件の研究センターであったのは、元朝日新聞モスクワ支局長の白井久也さんと社会運動資料センター東京の渡部富哉さんを共同代表とする日露歴史研究センターでした。それが2018年に、会員の平均年齢が80歳を越えて、もう資料集刊行や国際会議を続けられないということで、機関誌を50号まで出して解散しました。私たちの尾崎＝ゾルゲ研究会は、その業績と伝統を引き継ぐことで結成されました。資料と研究成果を引き継ぎます。

そこで、資料公開の状況と関連した研究史を概観します。端的に言えば、戦後すぐの時期にゾルゲ事件が世に出たのは、尾崎秀実という元朝日新聞記者でゾルゲ事件の被告が1944年にゾルゲと一緒に死刑になった。その尾崎秀実が、獄中から妻子に宛てて書いた書簡集『愛情はふる星のごとく』が残されていて、松本慎一ら友人たちがそれを編んで書物にし、1946年9

月に世界評論社から刊行され、1947年にかけてベストセラーになったのが最初です。毎日新聞第1回全国読書世論調査（昭和22年）では圧倒的支持を得て1位になり、書籍の年間売上げでも、1946年と1947年は2位、1948年は1位となり、今日まで続くロングセラーとなっています。

敗戦後すぐの日本が侵略戦争を反省し、民主化と平和憲法を制定した時期で、ソ連の社会主義も、反ファシズムの平和勢力として影響力を持っていました。ここでの尾崎秀実は、妻子を愛した家庭人であるだけでなく、侵略戦争に一人になっても反対して行動した平和の活動家、軍部に抵抗した「愛国者」として扱われました。日露歴史研究センターの会員の皆さんには、この「反戦平和のゾルゲ事件」に共感したジャーナリストや平和運動家の人々が多かったようです。

## ② ゾルゲの片腕尾崎秀実は「愛国者」であったか「売国奴」であったか

ところが1949年2月に、アメリカ陸軍省が「いや、彼らは平和のための活動をやっていたのではない、ソ連共産主義を広めるための赤色スパイだった」と公式に発表しました。戦時日本の特高警察や裁判所の記録を恣意的に再構成した、反共産主義のプロパガンダ文書でした。東西冷戦が始まり、アメリカ本国では「赤狩り」マッカーシズム、日本ではいわゆる「逆コース」で民主化から再軍備へと舵がきられる時期です。

当時の日本を占領し治安諜報活動を指揮していたマッカーサーの片腕、チャールズ・ウィロビー少将の名を取って「ウィロビー報告」と呼ばれ、先にも言いましたが『赤色スパイ団の全貌——ゾルゲ事件』という名で日本語訳が出されました。

しかも、1952年に出たウィロビー最終報告の原題は『SHANGHAI CONSPIRACY』、つまり「上海の陰謀」です。要するに、中国も日本も含めたアジアの大スパイ団だったとし、それが戦後にも受け継がれているとイメージされたわけです。

この冷戦期米軍報告書の線で、アメリカなら、例えばウィロビー配下のGHQ戦史課の責任者であったメリーランド大学教授ゴードン・プランゲが、1964-65年に日本で関係者から聞き取りをして補強した再調査記録が、1967年に『リーダーズ・ダイジェスト』誌の特集になり、没後に『ゾルゲ 東京を狙え』上・下（邦訳は千早正隆訳、原書房、1985年、原書はGordon W. Prange, Donald M. Goldstein, Katherine V. Dillon, *Target Tokyo : the Story of the Sorge Spy Ring*, McGraw-Hill Companies, 1984）という本になります。

日本では、1949年のウィロビー報告以後、占領軍や日本政府から、戦前戦後の日本共産党の歴史の全体がコミンテルン由来のソ連の手先・スパイとされてきましたから、「党内の裏切り者」伊藤律をスケープゴートにした共産党内の対立を煽り、反共攻撃の材料にされます。また、尾崎秀樹や川合貞吉の著書、それに松本清張の『日本の黒い霧』が決定的で、この米軍報

告を背景に、「赤色スパイもの」として大衆的に流布し定着しました。

### ③ みすず書房『現代史資料』から不二出版『ゾルゲ事件史料集成』への官憲文書の公刊

しかし、学問的な意味で、本当はどうだったのかと調べることを可能にしたのが、1962年のみすず書房『現代史資料——ゾルゲ事件』1 - 3巻刊行です。これによって、ゾルゲ諜報団の実際の活動がどのようなものであったか、日本の警察はなぜ彼らを検挙したのか、どのように訊問したのかという取り締まり・検挙のプロセスが、被告たちの供述から分かるようになりました。

この官憲資料については、1971年に『現代史資料——ゾルゲ事件』の第4巻が刊行され、その後も、いくつかの資料集などが作られるようになりました。

今日では、私が編集したのですが、不二出版から、警察だけではなく検察は一体どういうふうにゾルゲ事件をみていたのかという全10巻の資料集を『ゾルゲ事件史料集成——太田耐造関係文書』（加藤哲郎編集・解説、不二出版、2020年）として刊行しました。これは、2017年に国立国会図書館の憲政資料室に寄贈された、当時の元思想検事の太田耐造の所蔵史料をまとめたものです。

### ④ ゾルゲの名誉回復からソ連崩壊を経てゾルゲの電文資料も公開へ

1962年に『現代史資料』が出て、ようやくゾルゲがモスクワに対してどのような情報を送っていたのかが、ゾルゲら諜報団メンバーの供述に基づき、ある程度は実証的に分かるようになりました。しかしそれらは、被告たちの記憶に基づく供述で、実際にモスクワにどのような情報が伝えられたかは、分かりませんでした。

米国のウィロビー報告では、ゾルゲは1941年に御前会議の情報を流し、それによって日本はソ連に攻め込む北進ではなく、南進して東南アジア、シンガポールに向かうことになった、従ってソ連はシベリアの戦力を西方、つまり対独戦の方に使うことができた、それによってソ連は、どうにか持ちこたえて第二次世界大戦で勝利できたという話が出ていました。しかしその根拠となった電文そのものはなかったのです。

そこに、みすず書房の『現代史資料』が出ることにより、特高警察は、ゾルゲの送った情報は110項目400件におよぶ電報があったはずだと推論していたことが分かりました。ただし、実際の電文は、1941年10月検挙時に打電する予定だった暗号文しか、見つかっていなかったのです。110件といっても、2.26事件とかノモンハン事件とか、項目だけが並んでいるだけで、中身は分かりませんでした。いったいゾルゲが本当にモスクワに送った情報は何だったのかは、ずっと不明で分からなかったのです。

ごく一部だけが、1964年にソ連でゾルゲが名誉回復し「大祖国戦争勝利の英雄」にされて

以降、それに都合のいい「英雄ゾルゲ」にふさわしい部分のみが、ソ連や東ドイツで発表されるようになりました。

#### ⑤ ソ連崩壊後に現れたゾルゲの電信文、NHK取材班発掘からフェシュン編資料集へ

ソ連の崩壊後、1991年ですけれども、NHK取材班がモスクワに入って、ようやく本物の電文90通を見つけました。これを、<sup>しもとまい</sup>下斗米伸夫さんが編集して、『国際スパイ ゾルゲの真実』（角川書店、1992年）として刊行しました。特高警察が400通あるはずだと言っていたもののうち、90通が加わり100点以上がようやく原文で分かるようになったのです。

さらに、日露歴史研究センターの白井久也編著『国際スパイ——ゾルゲの世界戦争と革命』（社会評論社、2003年）という本が出ました。今回『ゾルゲ・ファイル』で紹介された650通の資料を見つけたアンドレイ・フェシュンという在日ロシア大使館の文化アタッシュをしていた日本研究者が、ゾルゲが日本から送った文書191通を見つけ、2000年に初めてロシア語原文でまとめて紹介しました。

それが2003年に、日本語でも『国際スパイ・ゾルゲの世界戦争と革命』（白井久也編著、社会評論社）の中に収録され、これでようやく、私たちはゾルゲがモスクワに送った電報はいったいどんなものだったのか、尾崎秀実や宮城与徳が集めた情報が、ゾルゲによってどういう文章にされてモスクワに送られたのか、なぜゾルゲの諜報活動がソ連で認められることになったのかが分かるようになったのです。これが、21世紀の研究の出発点になりました。

2020年にフェシュンにより収集され増補された650点の電文資料のうち、1941年以降の200点以上を収録して、邦訳『ゾルゲ・ファイル』（名越建郎・名越陽子訳、みすず書房、2022年）になったのです。650点すべてを翻訳するのは大変な分量になるので、今回はこれまで歴史的に特に問題になっていた1941～1945年の分を先に翻訳して出版しました。これだけでも全体の3分の1で、218点に及びます。これまで知られていた資料の倍以上です。それを使うことができるようになったのが、現段階です。

こうした話に興味を持って、1940年までのすべてのゾルゲの電文を翻訳したいと志す、日口関係史に詳しくロシア語のできる若い研究者が現れることを、私たちは期待しています。

### (3) 英語圏における実証的研究の進展

#### ① ディーキン&ストーリィ、ワイマントからオーウェン・マシューズ『ゾルゲ伝』へ

資料の公開に並行して、イギリスで刊行される英語圏での研究が、1966年にF.W.ディーキンとG.R.ストーリィの『ゾルゲ追跡』（邦訳は筑摩書房、1967年など）、1996年のロバート・ワイマント『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』（邦訳は新潮社、1996年など）、そして2020年のマシューズ『ゾルゲ伝』という流れが25～30年ごとに現れて、世界的なゾルゲ事件研究のス

タンダードになります。

もちろん、学術研究と通俗的読物の区別は、相対的です。アメリカ陸軍省の公式報告であるウィロビー報告『赤色スパイ団の全貌』はスパイ物語ですが、公文書でもあるのです。

ウィロビー報告は、今日から見れば、一行一行疑ってかかった方がいい内容です。しかしこれは、東西冷戦の時期に、アメリカがソ連のスパイをアメリカ 국무省や海外在住米国人の中にいるはずだとして、少しでもソ連や共産主義に関係した人物や思想を追放しなくてはならないという使命感をもって、膨大な費用をかけて作られたものです。

そのための資料集が、端的に『赤色スパイ団の全貌』で、ちょうど「ハリウッド・テン」といって、アメリカ映画界の10人以上の脚本家や俳優・監督が告発され、ハリウッドから追放するのにも使われました。それがそのまま50年代のマッカーシズム最盛期に流れていく。だからウィロビー報告は、マッカーシズムの一環として見る必要があります（アカデミー賞映画「ローマの休日」（1953年公開）の本当の脚本作家だったダルトン・トランボなど「赤狩り」犠牲者ハリウッド・テンについては、日本の山本おさむによる『ビックコミックオリジナル』2017年11号から2021年8号までの連載漫画『赤狩り THE RED RAT IN HOLLYWOOD』（小学館）、がよく知られています）。

## ② ウィロビー報告と関わった「プランゲ文庫」プランゲ博士の『ゾルゲ 東京を狙え』

この陸軍省報告の日本での調査を担当した一人が、もともとメリーランド大学歴史学者で日本占領ではGHQ歴史課のアメリカ側代表だったゴードン・プランゲ博士です。

若いメディア研究者であれば、「プランゲ文庫」をご存じかもしれません。私も早稲田大学客員教授時代によく使いましたが、占領期の日本のあらゆる出版物を網羅的に検閲した記録が、アメリカのメリーランド大学にあります。占領期の1945 - 49年に出た日本の出版物の全体は、新聞・雑誌・単行本ばかりでなく、労働組合の社内機関紙から俳句や短歌の同人誌まで、プランゲ博士と共にアメリカに渡ったので、私たちの占領期日本研究は、アメリカまで行かなければならないのです。その出版物と検閲関係資料の収集を行いメリーランド大学に納入したのがプランゲ博士で、「プランゲ文庫」となり、目録は日本でも見ることができます。プランゲは同時に、ゾルゲ事件の調査・研究もしていました。

陸軍省のゾルゲ事件レポートをウィロビー報告と言いますが、G2参謀二部のウィロビー少将自身が直接調査をしたわけではありません。陸軍省報告のもとになったアメリカ側の資料収集の中心の一人がプランゲ博士で、彼が後に関係者からの聞き取り再調査をまじえて書いた前出の『ゾルゲ 東京を狙え』が、今でも入手できます。これは、聞き取り対象も吉河光貞・川合貞吉・荒木光子などGHQ協力者に偏っていて、ウィロビー報告の改訂増補版ともいえるべきものです。

もっとも米軍ゾルゲ事件調査の、より直接的な中心は、聖公会牧師のポール・ラッシュ中佐によって行われましたが、このことは後で触れます。

### ③ 尾崎秀実に着目したチャルマーズ・ジョンソン『ゾルゲ事件とは何か』の先見性

もう一つ重要なのが、1964年にアメリカで書かれたチャルマーズ・ジョンソンのゾルゲ事件研究です。ジョンソンは『通産省と日本の奇跡』（原題：*MITI and the Japanese Miracle: The Growth of Industrial Policy, 1925-1975*, Stanford University Press, 1982）という本で、日本経済の成功は通産省の経済政策に導かれた効果で、自由な市場原理に基づいていないと批判した、有名なアメリカの政治学者です。その彼の、もともとの研究対象は、中国革命と戦後の新中国でした。

彼が中国共産党研究との関係で進めたのがゾルゲ事件の研究で、当初は『尾崎＝ゾルゲ事件——その政治学的研究』というタイトルで弘文堂より1966年に邦訳が出ました（原題：*An Instance of Treason: Ozaki Hotsumi and the Sorge Spy Ring*, Stanford University Press, 1964）、現在では、原書の1990年増補版に基づいて『ゾルゲ事件とは何か』という岩波現代文庫になり、私が「解説」を書いています（2013年）。

それは、もともとはゾルゲについての研究ではなく、なぜ中国革命が起こったのか、その中国革命に早くから注目した日本人としての尾崎秀実スポットを当てた研究です。ゾルゲは、1930 - 33年に中国でもゾルゲ諜報団を組織していたのですが、その頃、朝日新聞上海特派員で東亜同文書院の学生たちにも影響力があった尾崎秀実と知り合い、米国人ジャーナリスト、アグネス・スメドレーと共に、後に日本で行う情報収集の前段階の活動がありました。

### ④ ジョンソンはウィロビー報告の伊藤律発覚端緒説も批判

このチャルマーズ・ジョンソンの本は、ゾルゲではなく、尾崎秀実を主人公にした先駆的な英語の本です。日本の権力的捜査のやり方についても、大きな疑問を提起しまして、例えばウィロビー報告では伊藤律がゾルゲ事件をばらしたのが事件発覚の端緒と言っているが、あれはアメリカではCIAやFBIがよくやる手口で信用できない。自分自身で調べてみると、伊藤律は革命家としていろいろ問題はあるが、少なくとも尾崎秀実を裏切った「生きているユダ」でも、松本清張のいう「革命を売る男」でもないということ、すでにこの1964年の英文初版本で書いています。

ただし、この本が日本語に翻訳されて最初に出版された時、学術研究としては必須の原文の注や出典が全部省略されて、日本側の都合でスパイ読物にされていました（萩原実訳『尾崎・ゾルゲ事件——その政治学的研究』弘文堂、1966年）。もともとスタンフォード大学出版会から出た本格的な学術的研究書だったのですが、『現代史資料』が出たばかりの当時の日本では、

「ソ連の赤色スパイ」尾崎秀実を素材にしたスパイ物語として扱われたのです。

チャルマーズ・ジョンソンは、1990年にソ連が崩壊したときに、第2版として30頁以上の追加を含めた増補版を書き、それが『ゾルゲ事件とは何か』（チャルマーズ・ジョンソン著、篠崎務訳、加藤哲郎解説、岩波現代文庫、2013年）という本になりました。ここではすでに伊藤律が1980年に生還し、「スパイ」を否定する本人の証言も出ていましたから、ジョンソンは、ウィロビーやプランゲに異議を申し立てた自分の説に、大いに確信をもちました。

私は英語で出たゾルゲ事件関連本の中では、ジョンソンのものを高く評価し、第2版に基づく岩波現代文庫版に詳しい解説を書いています。関心のある方は、ぜひご参照ください。

#### (4) 分裂した東西ドイツのゾルゲ像

##### ① ゾルゲの研究は東ドイツが独占し、マードナーの本や「ソーニャ・レポート」

もちろんゾルゲ事件を研究していたのは、ソ連・ロシア、アメリカ、イギリスだけではありません。ゾルゲはドイツ人でしたから、ドイツにもありました。

しかしドイツは、1989年のベルリンの壁崩壊まで、東西に分裂していました。米軍ウィロビー報告が出たために、当時生まれたばかりの西ドイツで、有力な週刊誌『デア・シュピーゲル』1951年6-10月に、「ソ連秘密諜報員ゾルゲの運命」など17回のゾルゲ特集が連載されました。反共反ソ連のイデオロギー色が強いものですが、当時まだ存命中だった戦前在日ドイツ大使館員らから取材した証言などが入っており、今日から振り返ると貴重です。ヘード・マッシング『女スパイの道』（日刊労働通信社、1956年）、オットー・マイスナー『スパイ・ゾルゲ』（実業之日本社、1958年）のような反共ものも出されました。「赤色スパイ」ばかりでなく、「のんたぐれで、女たらしで、オートバイ狂のゾルゲ」というイメージは、この頃作られました。

しかし1964年にソ連がゾルゲを復権し「大祖国戦争の英雄」としたため、ドイツでのゾルゲの研究は、主要には東ドイツで行われました。戦後の東ドイツでは、ゾルゲは偉大な反ファッショの闘士として扱われました。東京ゾルゲ団の5人の有力諜報員のうち、唯一の生き残りであったマックス・クラウゼンが、戦後モスクワ経由で東ドイツに帰国したため、その証言などを用いたユリウス・マードナーの研究なども出されました（『ゾルゲ諜報秘録』朝日新聞社、1967年、『ゾルゲ事件の真相』朝日ソノラマ、1986年）。

上海でゾルゲの活動を手伝ったソーニャと言う女性の『ソーニャ・レポート』も出されました（初版1977年）。これは、本名ウルズラ・クチンスキー、別名ルース・ヴェルナー、東ドイツの著名な経済学者ユルゲン・クチンスキーの妹です。彼女は1930年代初頭の上海でのゾルゲ諜報団の助手で、ゾルゲの推薦で、ソ連赤軍情報部の有能な諜報員になった。上海では建築家ドルフ・ハンブルガーの夫人として、ゾルゲ、スメドレー、尾崎秀実ら諜報員の秘密の会合場所を提供していたのです。

ただしゾルゲは、彼女を諜報員の素質があるとしてモスクワに推薦しただけで、彼女自身はゾルゲ事件とは関係せず、自立していきました。第二次世界大戦中にイギリスで、後にソ連の原爆スパイになるクラウス・フックスを発掘しマンハッタン計画に送り込んだことが有名で、ソ連の原爆実験のための設計図を米国から盗んだ「ゾルゲ以上の諜報員」とされています。

つい最近、ベン・マッキンタイアー の評伝『ソーニャ、ゾルゲが愛した工作人員——愛人、母親、戦士にしてスパイ』（中央公論新社、2022年、原書は *Sonya: Moscow's Most Daring Wartime Spy*, Random House Large Print, 2020）も出ていますので、ご参照ください。

## ② ドイツ統一で始まった、本格的なゾルゲ事件研究

それが1991年にドイツが統一されたところで、ようやく新しい研究が出てきます。それまでは、ドイツ語版のWikipediaを見ていただければ分かりますが、西ドイツにはあまり研究はありませんでした。ドイツ語版Wikipediaの参考文献の最初に出ていたのは、実は、手塚治虫『アドルフに告ぐ』のドイツ語訳でした。

その伝統で、最近ではゾルゲ事件についてのグラフィックストーリー＝絵物語、日本流で言えばアニメの物語が作られます（Isabel Kreitz, *Die Sache mit Sorge: Stalins Spion in Tokio*, Carlsen Verlag, 2008）。これは、いまでもドイツでゾルゲ事件について読まれている定番の本です。

もともとドイツ人にとって、1930年代のリヒアルト・ゾルゲは、「ソ連赤軍情報部のスパイ」という顔は隠されて、『フランクフルター・アルゲマイネ』というドイツの一流新聞、アメリカでいえば『ニューヨーク・タイムズ』のようなクオリティーペーパーに寄稿していた知識人でした。ヨーロッパ随一のアジア政治の評論家でした。ですから、そうしたジャーナリストとしてのゾルゲの活動を紹介し、評価する試みも現れました。テレビドラマにもなっています。

そういう形で、ヒトラーの時代にソ連のためにスパイをやっていたゾルゲという知識人がいて、もしもヒトラーが政権を握ることがなければ、ドイツの学問世界で大きな役割を果たしたはずの人だったというふうになってきました。

## ③ フランクフルト学派の出発点、1923年マルクス主義研究週間でのゾルゲの役割

その面からの研究が、日本で、すでに本になっています。八木紀一郎『20世紀 知的急進主義の軌跡——初期フランクフルト学派の社会学者たち』（みすず書房、2021年）です。思想史に詳しい方はご存じかもしれませんが、ドイツにはフランクフルト学派という有名なマルクス主義から発した、しかしロシア的なレーニン主義とは対立した、思想・学派があります。現代で言えばユルゲン・ハーバーマスがその代表者ですが、その前に、テオドール・アドルノやマックス・ホルクハイマー、ヴァルター・ベンヤミン、フランツ・ノイマン、エーリッヒ・



フロム、ヘルベルト・マルクーゼなどなど、ファシズム期に多くは米国に亡命して名を成した著名な学者たちがいます。

その流れの始まりは、1923年のドイツにおけるマルクス主義研究週間であることは、よく知られています。これを主催し組織したのが、なんと若きマルクス主義研究者リヒャルト・ゾルゲでした。当時ドイツ共産党員で、ローザ・ルクセンブルグの『資本蓄積論』に沿った研究で、ハンブルグ大学で博士号を取ったばかりでした。

このフランクフルト学派誕生の契機となるマルクス主義研究週間に、日本でもよく知られているルカーチ・ジェルジュ、カール・コルシュ、カール・ヴィットフォークらが出席しました。この後に有名な学者になる国際的なマルクス主義研究者たちを集めた研究会の事務局を、若きゾルゲは務めていました。

#### ④ 若きマルクス主義者ゾルゲの写真は、福本和夫がシャッターを押していた

面白いことに、このマルクス主義研究週間の出席者たちについて、2枚の写真があります。この片方の写真に、福本和夫という日本人が写っています。彼は1920年代関東大震災の頃の日本で、マルクス主義の普及に大きな役割を果たしました。「福本イズム」と呼ばれます。日本に理論的な形でルカーチやコルシュを紹介した福本和夫が、このフランクフルト学派の結成集会に出ていました。福本和夫がジャンパー姿のゾルゲなどと一緒に入った集合写真が、日本では知られています（第3図左、八木紀一郎『20世紀 知的急進主義の軌跡』より）。



第3図 (左) 八木紀一郎『20世紀知的急進主義の軌跡』(みすず書房, 2021年)より / (右) 日露歴史研究センター『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』創刊号(日口歴史研究センター事務局, 2003年)表紙

ところが同じような写真がもう一枚あって、ゾルゲやルカーチ、コルシュはどちらにも写っ

ていますが、福本和夫は写っていない（第3図右，日露歴史研究センター『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』創刊号表紙）。若い福本がシャッターを押したので，同じ日の同じポーズのもう一枚の集合写真には，日本人福本和夫は入っていません。

福本和夫は，このマルクス主義研究週間に出たことは回想の中で書いていたのですが，集合写真のシャッターを押す若手の一人として出席していた。もう一人，シャッターを押す若いドイツ人がいて，この二枚の写真になったと考えられます。

この福本和夫が写っている集合写真が日本に残っていたために，それまでフランクフルト学派についてのスタンダードな研究書であったマーティン・ジェイ『弁証法的想像力——フランクフルト学派と社会研究所の歴史 1923-1950』初版本の邦訳（荒川幾男訳，みすず書房，1975年）では1922年とされていた第一回マルクス主義研究週間が，実は，福本和夫も参加できた1923年であったことが，事務局を務めたゾルゲの足跡と2枚の集合写真の比較，福本和夫の証言などで分かってきました。マーティン・ジェイも，第2版では1923年と訂正していますが，これは邦訳されていません。

八木紀一郎さんの本は，このドイツ共産党に入ったばかりの知識人ゾルゲについて，一章を割いていますから，ぜひご参照ください。「スパイ・ゾルゲ」ではなく「学者・ゾルゲ」，彼の知的な役割も再評価されるようになってきたのです。

## （5）日露歴史研究センターの功績と遺産

### ① 伊藤律発覚端緒説の冤罪を立証して名誉回復

もちろん日本が，国際的なゾルゲ事件研究の中心でした。朝日新聞元モスクワ支局長の白井久也さん，それに在野の歴史家で東京社会運動資料センターを主宰する渡部富哉さんを共同代表とした日露歴史研究センターが，20世紀の終わりから21世紀の初めの約20年間，世界のゾルゲ事件研究とその国際的ネットワークをけん引してきました。

その記録は，日露歴史研究センター『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』という形で，50号まで出され，国立国会図書館などに入っています。そのほか単行本も何冊か出ていますが，その最大の功績は，伊藤律がゾルゲ事件を初めて漏らしたというアメリカのウィロビー報告，あるいはそれ以前の日本の警視庁の内部資料で扱われていた問題を，権力が日本共産党を貶めようとした陰謀で冤罪であったことを，明らかにしたことです。

### ② 伊藤律の冤罪告発で尾崎秀樹・松本清張の誤りも訂正へ

確かに伊藤律は戦前何回か逮捕されたことはありますし，米国共産党に関係する知人について洩らしたことはあったけれども，ゾルゲ事件捜査の端緒というのは，伊藤律の供述の線ではなく，米国帰りの日本人を長く監視していた特高警察の外諜活動の延長上にあったことを，日

露歴史研究センターは明らかにしました。渡部富哉『偽りの烙印——伊藤律・スパイ説の崩壊』（五月書房、1993年）がその代表的成果で、日露歴史研究センターの研究会での私の研究報告などでも傍証されました。私は会員ではなく協力者でしたが、それを平凡社新書『ゾルゲ事件』（2014年）に書きました。

渡部富哉さんらは、特高警察資料、米国陸軍省報告（ウイロビー報告）ばかりでなく、尾崎秀樹の「生きているユダ」や松本清張の「革命を売る男」も誤りだということを明らかにしました。松本清張『日本の黒い霧』については、文藝春秋社に抗議し、新聞でも大きく扱われました（『東京新聞』2013年5月28日夕刊）。現在文藝春秋社ではそれを認め、訂正が行われています。また伊藤律の息子である伊藤淳さんの『父・伊藤律——ある家族の「戦後」』を2016年に講談社から刊行することにより、伊藤律の事実上の「名誉回復」がなされました。

### ③ 企画院事件から横浜事件も視野に、国際ゾルゲ研究会議を9回開催

さらに日露歴史研究センターは、ゾルゲ事件研究の裾野を大きく拡げました。ゾルゲ事件だけではなく、当時日本では国家権力が防諜の名目で起訴したいろんな諜報事件がありました。「企画院事件」「中共諜報団事件」「満州合作社事件」「満鉄調査部事件」「横浜事件」など、これらが実は、当時の日本の天皇制権力にとっては、広義のゾルゲ事件として見られていました。当時の権力側の記録から、ゾルゲ事件の被告たちと関わる何人かの関係者を見出して諜報事件をでっち上げることがありました。

日露歴史研究センターの研究で、「企画院事件」は、ゾルゲ事件より前に自由主義的な官僚たち何人かが検挙されるという事件でしたが、政府の中に軍部に反対するグループがいるのではないかと疑われるきっかけとなりました。ゾルゲ事件では内閣嘱託で満鉄調査部で仕事をした尾崎秀実や、中国通の西園寺公一・犬養健まで検挙されて、「中共諜報団事件」「満州合作社事件」「満鉄調査部事件」などが一つながりのものにされました。

戦争の最後まで引きずるものとして、「横浜事件」もでっち上げられました。『中央公論』『改造』など大手出版社の中に「アカ」が入り込んで、戦争反対の論陣を雑誌などで秘かに尾崎秀実と親しい細川嘉六ら共産主義者にやらせているのではないかという冤罪です。これも1942年9月に川田寿という元米国共産党員の帰国とからめて、尾崎秀実の友人・細川嘉六の雑誌『改造』論文「世界の動向と日本」をゾルゲ事件の延長上の「共産主義宣伝」とみなした冤罪でした。

そして何よりも、日露歴史研究センターは、国際シンポジウムを9回開いて、ロシア、ドイツ、アゼルバイジャン、モンゴル、中国、オーストラリアなどへと国際的なネットワークを拡げました。ゾルゲ事件の世界的な研究を主導し組織した功績があるのです。

### 3. 情報戦としての尾崎＝ゾルゲ研究史

#### (1) 1942年5月16日司法省発表から始まった情報統制・世論誘導

##### ① トップ記事ではなく4段記事、目立たなかった5月17日「国際諜報団検挙」発表記事



第4図 1942年5月17日付『東京朝日新聞』朝刊1面(朝日新聞社所蔵、承認番号24-0879)

※朝日新聞社に無断で転載することを禁じます

私たち尾崎＝ゾルゲ研究会は、もともと石堂清倫さんが呼びかけ、白井久也さん・渡部富哉さんらが中心だった日露歴史研究センターの功績を引き継いで、新たな研究を進めていこうとしています。その際、これをどのような観点で進めていくかという点で、私個人は政治学者ですので、アントニオ・グラムシの「機動戦から陣地戦へ」の思想の延長上で、「20世紀の陣地戦・組織戦から21世紀の情報戦・言説戦へ」という観点から、尾崎＝ゾルゲ研究をとらえています（この方法論については、加藤哲郎『20世紀を超えて——再審される社会主義』2001年、『情報戦の時代——インターネットと劇場政治』『情報戦と現代史——日本国憲法へのもうひとつの道』2007年、いずれも花伝社、をご参照ください）。

これは、前回12月の山田館長の講演会でも、強調されていたところです。ゾルゲ事件について何かを語るということ自体が、政治的な意味あるいは国際関係的な意味を持つてくる可能性があります。しかも、国によって研究の仕方、ゾルゲの扱い方が違います。いまロシアでは、ソ連で名誉回復した1960年代に続く、「第二のゾルゲ・ブーム」が起こっています。これは、KGB（ソ連国家保安委員会）出身のプーチンの政治がバックにある問題です。

ゾルゲ事件の初発から、情報戦は孕まれていました。よく尾崎秀実・ゾルゲらスパイ団の1941年検挙が大々的に報じられて、尾崎を囑託にしていた近衛内閣が倒れ、東条内閣の日米戦争開戦を支持する世論につながったような話が「大衆文化」ではみられるのですが、これは全くのでっち上げ・陰謀論です。ゾルゲ事件は1941年10月の尾崎秀実やゾルゲの検挙時には、全く報道されていません。ゾルゲを信頼していた駐日ドイツ大使のオットでさえも、ゾルゲの

検挙に驚愕し抗議したほどでした。

最初の報道は、尾崎＝ゾルゲ検挙から半年以上経った、1942年5月16日の司法省発表で、新聞記事としては5月17日に解禁になります。1941年12月8日が真珠湾攻撃で日米戦争が始まっていますから、その半年後、ミッドウェー海戦の直前で、日本軍にまだ勢いのあった時期です。

1942年5月17日に、司法省発表という形で新聞記事になっていますが、これは後でも触れますが、あまり大きな記事ではありません。この朝日新聞記事を見ていただければ分かるように、1面トップは「我が潜水艦の敵船舶撃沈」という大本営の戦果発表です。この大本営発表の下の目立たない所に、「国際諜報団検挙さる」という4段記事が出ています（第4図）。

これは、当時の司法省が、報道記事は4段以内に、被疑者として出す名前はゾルゲ・尾崎以下5人の首謀者と「情を知らず」して彼らに協力した西園寺公一・犬養健という政府要人のみで、その他の名前は出すなという指示に基づき、きわめて厳密に検閲され、統制された記事です。ですから、被告でも久津見房子とか安田徳太郎ら尾崎・宮城・西園寺・犬養以外の日本人は、この時点では全く知られない。そういう事件として報道され、戦後も1949年ウィロビー報告までそのままなのです。

「国際諜報団」というのは、当時コミンテルンという共産主義の国際的な組織がありました。本部はモスクワでしたが、世界各国に支部があり、例えば日本共産党はコミンテルン日本支部でした。その「国際諜報団」＝共産党のスパイ団だという記事になっています。当然その背後にソ連があるのですが、司法省発表には、なぜかソ連という国名・言葉は一言も出てきません。

ゾルゲはドイツ大使館の嘱託顧問格で、オット大使から重要な戦時情報を得ていましたが、ドイツという国名・言葉も出てこないのです。ですから、コミンテルンと関係する共産主義の大物スパイ5人が捕まって、それに首謀者の尾崎秀実の友人として皇室に近い西園寺と犬養も無自覚に関わっていた、という報道でした。

## ② 戦時中の報道は1942年司法省発表のみ、ただし昭和天皇には詳細な「上奏文」

戦時中のゾルゲ事件の報道は、この1941年5月司法省発表だけでした。あとは朝日新聞が社内報で尾崎とゾルゲの死刑が決まった時に社内で報道されたという記録はあるのですが、それだけです。ですから、ゾルゲ事件で100人以上の人が取り調べを受け、35人ほどが被告になっているのですが、諜報団の中心人物5人と西園寺・犬養以外の人たちは、戦時中は、名前もほとんど知られていませんでした。

わずかに司法省、内務省、皇室関係者、軍部首脳など政府中枢の要人たち、それに特高警察、思想検察、憲兵隊などの共産主義対策、あるいは国家機密漏洩を取り締まる人たち、国家安全保障の中枢の関係者だけが、内務省の捜査記録、司法省の裁判記録を見ることができたのです。

しかも昭和天皇と皇室関係者にだけは、国家機密漏洩の詳細な記録である「上奏文」が渡されていましたが、これは捜査関係者に対しても極秘でした。

これら当時の捜査記録には「極秘」と押印されて、1945年8月の敗戦時に焼却されていてもおかしくないものです。たまたま関係者が個人的に持っていたり、保管場所が戦災を受けずに焼かれなかったものが残りました。

すべてが戦後になって、占領軍の捜索などで明らかになったものです。米国ウイロビー報告で一部が明らかにされる前に、一方で死刑に処された尾崎秀実の獄中書簡『愛情はふる星のごとく』が出まわって、当時の女性雑誌や硬派の論壇雑誌なども「尾崎秀実の妻子への愛情と反戦平和思想」として流布し、獄中からの手紙の家族愛が、日本の民主化の中で取り上げることになりました。

他方で、占領期ですから、GHQによる情報管理・検閲があり、公的には1949年2月に米国陸軍省ウイロビー報告が「共産主義ソ連の赤色スパイ団」事件としてセンセーショナルに取り上げたために、一般の人々も知るものとなったのです。

## (2) 占領期の情報戦——戦後日本のゾルゲ事件イメージの出発

### ① 「逆コース」と併行した、「反戦平和の愛国者」尾崎から「ソ連の赤色スパイ団」へ

戦後初発のイメージは、一方では尾崎秀実の獄中書簡集『愛情はふる星のごとく』、他方ではGHQ・G2のウイロビー報告でした。ウイロビーは、GHQのマッカーサーの副官で、参謀二部G2の責任者だった人ですが、実際にウイロビーが調査して報告書を作成したわけではありません。GHQの中で、G2は治安維持や戦犯を含む犯罪摘発、それに対外防諜を担当していました。日本国憲法の制定や軍・内務省・財閥解体、労働組合奨励、農地改革や日本国憲法制定を主導する民政局GSとは対立することが多く、当初のマッカーサー施政はGS寄りでしたが、やがて反ソ反共のG2が主導する、いわゆる「逆コース」になります。

戦後のゾルゲ事件イメージは、これと併行します。GSがポツダム宣言に沿った非軍事化・民主化、日本国憲法の制定・施行を進めていた時期は、尾崎秀実の『愛情はふる星のごとく』が読まれ、戦前日本にも天皇制と軍国主義に抵抗し世界平和のために活動する人たちがいたんだと納得させる、いわば代弁者でした。獄中非転向で戦後合法化した日本共産党の幹部たちと並んで、反戦平和の担い手とされました。

ところがGHQ・G2のウイロビーは、開戦前夜の日本で発覚したゾルゲ事件の資料を集め、特高警察や思想検察などの極秘捜査記録やゾルゲ＝尾崎秀実を死刑に処した裁判記録から、当初は米軍諜報部隊内で共産主義の浸透に対抗するための内部資料を作り、1949年2月には「赤色スパイ団の陰謀」を告発する米国陸軍省報告として大々的に発表するに至るのです。

② 右派の大衆時局雑誌『政界ジープ』対左派の『真相』の対抗



第5図 『政界ジープ』1948年10月号表紙

戦後のゾルゲ事件イメージについて興味深いのは、当時の大衆雑誌あるいは時局雑誌での扱いが、大きく関わる点です。特に『政界ジープ』という右派の時局雑誌は、いわゆるエログロ・ナンセンスの雑誌に近い、暴露ものを売りにするスキャンダル雑誌ですが、これが実は、ウィロビー報告より4か月ほど前の1948年10月号で、ゾルゲ事件を「赤色スパイ事件」と名付けてセンセーショナルに取り上げた、最初の大衆的出版物でした。

戦後すぐの時期に、尾崎秀実の『愛情はふる星のごとく』がベストセラーになりました。それは、民主化の波に乗って創刊された総合雑誌・論壇雑誌『世界』『世界文化』『潮流』などで、社会主義ソ連が英米と一緒に日独伊三国同盟と戦って勝利した、それはファシズムに対する

民主主義の勝利であり、ソ連に日独の戦争情報を流してファシズムを倒す上で貢献したドイツ人ゾルゲや日本人尾崎は、ソ連という第三国の諜報員というよりも、自国の戦争に反対した平和の戦士なのだ、と扱われてきました。

大衆雑誌には、左派のバクロ雑誌『真相』がありました。日本共産党員の佐和慶太郎が創刊し、旧軍人や皇族・政府要人のスキャンダルを報じました。GHQ批判はプレスコードで禁止されていましたが、占領期にGHQによる雑誌検閲を最も多く受けた雑誌として知られています。

左派のスキャンダルバクロ雑誌『真相』は、今日では復刻版が出ていますが、後に岡留安則が『噂の真相』を創刊する際のモデルになった雑誌として有名です。戦争中に軍部はどんなに愚かなことを強いたのかとか、保守政界の女性関係とかを暴露し売り上げを伸ばしました。今日で言えば、『創』と『選択』といった反骨・反権力のジャーナリズムです。

③ ゾルゲ事件を「赤色スパイ事件」にした『政界ジープ』は元731部隊医師の右翼雑誌

それに対して『政界ジープ』は、今日で言えば『週刊文春』や『週刊新潮』、あるいはよく分裂しましたから『正論』『Will』『Hanada』などにあたります。

創刊したのは、もともと関東軍防疫給水部 731 部隊で細菌戦や人体実験にも関わった軍医で二木秀雄といます。ウィロビーの率いる占領軍の反共防諜部隊に取り入って、保守勢力の内紛や共産党や社会党のスキャンダルを報じて大衆的に読まれた時局雑誌です。

一方に右派の『政界ジープ』、他方では左派の『真相』という月刊誌が、共に自称 10 万部の発行部数を誇り、一般大衆への影響力を競い合っているもとので、1949 年 2 月の米軍ウィロビー報告の半年前、1948 年 10 月号の『政界ジープ』特別号が、初めて「尾崎、ゾルゲ 赤色スパイ事件の真相」という特集を大々的に報じました。「赤色スパイ」という言葉がゾルゲ事件に対して使われたのは、これが初めてでした。

その半年後にウィロビー報告が出て、米軍が公式にゾルゲ諜報団を「赤色スパイ団」と発表して当たり前になってしまうのですが、この『政界ジープ』のゾルゲ事件スクープは、占領軍の中から出たリーク情報だろうと私は推測します。

尾崎秀実の『愛情はふる星のごとく』がベストセラーになって、同情・共感する人が多い、黒沢明監督がそれに影響されて映画「わが青春に悔なし」(1946 年)を作ったりして、ゾルゲ事件を反ファシヨ活動のように扱う風潮がある。そういう風潮を覆すために、731 部隊由来の右派時局雑誌を使って、ゾルゲ＝尾崎はソ連の手先で「赤色スパイ事件なんだ」と世論を誘導したのです。

ゾルゲの愛人だった石井花子の回想『人間ゾルゲ』の中に、この『政界ジープ』1948 年 10 月のゾルゲ事件特集号を見て、ゾルゲの墓はない、ゾルゲの遺体は引き取り手がなくて雑司ヶ谷の共同墓地に入っているはずだという記事を見て、彼女は雑司ヶ谷墓地の墓堀りの人たちに頼んで、死刑になった犯罪人の骨を掘り起こしてもらったら、日本人にはない太い骨が出てきた。第一次世界大戦で銃痕を受けたゾルゲの骨だと確信し、それを多磨霊園に移してゾルゲの墓碑を建てた、このように述べています。

#### ④ GHQ によるゾルゲ事件捜査と米本国の「赤狩り」

「赤色スパイ狩り」としての GHQ によるゾルゲ事件捜査は、敗戦直後から幾重にも行われています。中心になったのは、G2 ウィロビーの反共・防諜活動で、敗戦直後に焼却されたといわれた警察、裁判記録の一部が発掘されました。関心のある方は、加藤哲郎『ゾルゲ事件——覆された神話』(平凡社、2014 年)を読んでいただければいいのですが、その中でも、あまり有名でないが重要な役割を、二人の人物が果たします。一人は、荒木光子という日本人女性。もう一人はポール・ラッシュ中佐という、日本語のできる米軍中堅将校です。

荒木光子は、夫が元東大経済学部教授で東京商工会議所の荒木光太郎で、GHQ 歴史課の日本側代表です。アメリカ側の代表が、プランゲ文庫で有名なゴードン・プランゲ博士でした。ところが GHQ との関係では、荒木光太郎よりも、夫人である荒木光子の方が、大きな権力を



持っていました。というのは、荒木光子の実家は当時の三菱財閥の番頭格莊清次郎で、三菱の令嬢として戦前からドイツ大使館やイタリア大使館などに出入りし、東京で開かれる大きな社交パーティーでは女王だった人です。ゾルゲとも、ドイツ大使館のパーティーで、夫と共に留学した際に学んだドイツ語で話していました。

#### ⑤ 「ウィロビーの東京妻」と言われた三菱財閥令嬢荒木光子の隠れた権力

この荒木光子が、戦後はG2 ウィロビーの日本人妻と呼ばれていて、戦前の日本にゾルゲというスパイがドイツ大使館にいて、秘かにソ連に情報を流していたという話を、G2のウィロビー少将に伝えたと言われています。

GHQ 幹部の女性問題で、よく知られているのは、GHQ のGS、日本の民主化を主導したケーデイス大佐と鳥尾子爵夫人のスキャンダルです。日本国憲法の制定に重要な役割を果たしたケーデイスには東京妻がいて、それが鳥尾鶴代という夫も存命中の旧子爵婦人でした。しかし、ケーデイスの容共姿勢に批判的だったウィロビーの陰謀で、ケーデイスはアメリカの家族に日本でのスキャンダルが伝えられ、失脚して帰国してしまう。そしてG2のウィロビー少将の方は、むしろ三菱令嬢の荒木光子からいろいろ聞き出して、その情報を反共謀略に使う。ゾルゲの件もその一つで、そのため調査課のアメリカ側代表で荒木光子とも親しかったプランゲは、後に『ゾルゲ 東京を狙え』を書くのです。

これは一部ではよく知られたことですが、推理作家松本清張が、生前最後に書いたかったテーマが荒木光子でした。その概要は、「占領『鹿鳴館』の女たち」として婦人公論に書いたことがあります（『松本清張全集』第34巻、文藝春秋社、1974年）、彼が最後に単行本にしたかった主題は、荒木光子論だったといえます。

この荒木光子については、最近ようやく本格的な研究が現れ、ウィロビーと結んだ占領期の影の権力者「女スパイ・荒木光子の諜報活動」として、阿羅健一『秘録・日本国防軍クーデター計画』（講談社、2013年）で大きく取り上げられ、また北原恵「松本清張、未完の仕事——《荒木光子の戦中・戦後》」という論文として、北九州市立松本清張記念館から学術報告書が作られています（2020年）。関心のある方は、ご参照ください。

#### ⑥ 聖公会牧師ポール・ラッシュは戦犯リストを作成し「清里の父」へ

もう一人、ポール・ラッシュが重要です。占領期米軍のゾルゲ事件資料の収集の中心、特に米国陸軍省ウィロビー報告の土台を作ったのは、日本通のポール・ラッシュ中佐でした。

ラッシュは、戦前来日した聖公会の牧師で、立教大学の英語の教員でした。戦争が始まり、日米関係が敵対関係になったため、有名な日米交換船、ハーバード大学に留学していた都留重人や鶴見和子らが米国から日本に戻ってきて、それと交換に、開戦まで日本に留まっていた米

国人がアメリカに船で戻った、その一員でした。帰国して軍に入り、米陸軍日本語学校の教師になりました。つまり、立教大学で日本語にも通じていたため、大量の日本語のできる将校・兵士を育て、占領期に日本に送りだす上で重要な役割を果たします。

彼自身も、戦後すぐに日本にやって来て、まず母校の立教に行ったら、本来キリスト教大学であるはずだったのに、立教大学の教会のチャペルは食糧不足で豚小屋になっていた。本来ならばイエス・キリストがまつられるはずの聖壇に、天皇の「御真影」がまつられていた。つまり、戦前の日本では本当のキリスト教教育ができなかったということで、当時の立教大学の理事ほか経営者を追放します。いわゆる「大学の民主化」の始まりで、立教大学の古いナショナルリスティックな教師たちを追い出し、新しいキリスト教教育を始めます。

日本の特高警察の思想取り締まりの対象者をカード化し、公務員の「職員録」から高級公務員の職歴を割り出し、公職追放や総選挙の立候補資格を決めていった実務の中心がラッシュでした。

ポール・ラッシュが有名なのは、アメリカンフットボールを紹介して「日本におけるアメフトの父」といわれ、戦時中禁じられたベースボール教育を日本で戦後すぐに復旧させて、学生野球復興の立役者になったことです。立教大学にはポール・ラッシュ奨学金が今でもあります。

それから1948年に彼は軍を辞めて、聖公会牧師に戻りますが、山梨県の清里村に教会を建てて開拓を進め、「清里の父」と呼ばれ、今では清里にポール・ラッシュ記念館があります（山梨日日新聞社編『清里の父 ポール・ラッシュ伝』ユニバース出版社、1986年、参照）。

#### ⑦ 川合貞吉を訊問し伊藤律・スモドレー告発スパイに仕立てたポール・ラッシュ

ところがこの人物が、戦前大陸浪人だったがゾルゲ事件に関係した川合貞吉を尋問して、川合から上海・東京でのゾルゲ諜報団の活動実態を聞き出したうえに、1948年ぐらいから、日本共産党の農民部長をしている伊藤律を失脚させるシナリオを作ります。川合貞吉は、戦時中に尾崎秀実ばかりでなく尾崎と同郷の伊藤律とも会ったことがあり、伊藤律は何度か特高警察に検挙されたので、日本の警察はその線からゾルゲ事件を追及できたはずだという情報を、ポール・ラッシュに伝えるのです。その訊問の際のツーショット記録写真が、米国国立公文書館の陸軍情報部（MIS）「川合貞吉ファイル」中に残されていました。

ポール・ラッシュが訊問して、戦後民主化の時期に勢いを増した日本共産党を、その指導者である伊藤律がもともと尾崎秀実につながり、しかも秘かにゾルゲ事件発覚につながる情報を特高警察に提供した疑いがある、彼は権力側のスパイであった、共産党は「ソ連の手先」で、戦後も「赤色スパイ」は世界中で活動しているという反共宣伝に、謀略として用いるのです。



第6図 川合貞吉とポール・ラッシュ（米国国立公文書館所蔵，筆者撮影）

⑧ 伊藤律を中国の監獄に送り込んだ日本共産党北京機関と松本清張「革命を売る男」の責任

当時伊藤律は、日本共産党の中で徳田球一の右腕で羽振りがよかったので、彼を失脚させれば日本の共産革命を遅らせ防ぐことができるという話を、ポール・ラッシュは川合貞吉から引き出してウィロビーに伝えました。

川合は、ラッシュから月2万円の報酬をもらって、ゾルゲ、尾崎、スメドレーや宮城与徳らがすでに死刑になったり獄中死したことをいいことに、自分だけが上海でのゾルゲ諜報団を直接体験した生き残り証人だと売り込んで、ウィロビーとポールラッシュの作ったシナリオに沿ったかたちで、雑誌に上海時代のゾルゲ・尾崎・スメドレーも登場する手記を書き、本を出し始めるのです。

それで、日本共産党内にも指導者対立と結びついた疑心暗鬼をうみ、伊藤律は「裏切り者」「転向者」「スパイ」と疑われる。それを、尾崎秀実の腹違いの弟秀樹が「生きているユダ」と告発し、松本清張が「革命を売る男」として広めたのです。

伊藤律は、1980年まで中国の監獄に軟禁されるのですが、そのもとになる共産党内の粛清を引き起こすための謀略ストーリーの大筋を作ったのが、このポール・ラッシュでした。川合貞吉自身も『ある革命家の回想』など何冊かの本を出しますが、その裏で、米軍から報酬をもらって本物のスパイになり、CIAの学校で教えたりしていたのです。

このように、米国陸軍省ウィロビー報告は、荒木光子、川合貞吉らの証言と、ポール・ラッシュやゴードン・プランゲらの日本警察資料収集と謀略プランから生まれたものです。米国人の非米活動を取り締まり、日本でソ連を信奉する左翼勢力内部の攪乱を狙ったものです。ある種の陰謀論が、ゾルゲ事件についても占領期に作られたのです。それに乗ってしまったのが、尾崎

秀樹や松本清張と了解していただければいいかと思います。

木下順二の「オットーと呼ばれる日本人」は、尾崎秀実を主人公にしている、ウィロビー報告や伊藤律に直接触れていませんが、1962年初演で、まだ『現代史資料』やソ連側資料が出てくる前の作品です。冒頭の有名な場面の台詞は川合貞吉の上海回想を主たるベースにしていますから、今日的には、史実に照らしての見直しが必要です。

### (3) 1950年代大衆文化としての「マスタースパイ・ゾルゲ」

#### ① ウィロビー報告から石井花子・尾崎秀樹・松本清張のゾルゲ像へ

こうした「マスタースパイ・ゾルゲ」を焦点化した陰謀論風大衆文化は、『政界ジープ』のようなスキャンダル時局雑誌から始まって、石井花子の『人間ゾルゲ』や川合貞吉の『ある革命家の回想』、尾崎秀樹『生きているユダ』、松本清張『日本の黒い霧』などを通じて普及しました。

右からは「赤色スパイ」「ソ連の手先」であり、左からも、伊藤律を「生きているユダ」「革命を売る男」とレッテル貼りして「スパイ合戦」とされただけではなく、例えば尾崎秀実は、「反戦平和の愛国者」から「世界共産主義のユートピアを夢見た空想的売国奴」までの幅の中で取り上げられました。これが、ゾルゲ事件の1960年代までの物語です。

恐らく会場にいらっしゃるお年寄りの方々が知っているゾルゲ事件とは、こういう「赤色スパイ物語」だと思います。1960年代に、みすず書房の『現代史資料——ゾルゲ事件』が出て、またソ連もゾルゲの存在を認めるようになって、ようやく学術的検討が可能になり、少しずつ変わってくるのですが。

#### ② 日米対ソ諜報共有の戦後版『外事警察資料』第3巻5号が『現代史資料』の原本

1962年に刊行されるゾルゲ事件の官憲資料の集大成、みすず書房の『現代史資料』1-3巻発刊が、その大衆文化風スパイ物語、米国マッカーシズムを背景にした陰謀論を見直すきっかけになりました。

もっとも『現代史資料』1-3巻のもとになる日本側警察資料は、日米支配層の中の限られたインテリジェンス・サークルの内部で、1957年に『外事警察資料』として、部外秘の警視庁内部資料として作られていました。それが第1巻にゾルゲ、第2巻に尾崎秀実、第3巻はそれ以外の被告に関連する資料に仕分けて再編集されて、みすず書房の『現代史資料』1-3巻になったのです。

もとになった警察資料は、警視庁警備局作成『部外秘 外事警察資料』第3巻5号(1957年6月)で、戦前の特高警察の捜査記録、訊問調書や判決文を網羅したものです。これは、『外事警察資料』シリーズの第3巻5号となっています。戦前にも特高外事警察編の同じ名前の『外事警察資料』

がありましたが、この第3巻は明らかに戦後のシリーズで、戦前のものとは違います。第3巻が1957年に出たのですから、その前に第1巻、第2巻があるはずです。

これはぜひ、インテリジェンスに関心のある若い研究者に調べていただきたいのですが、少なくとも日本での国会図書館を含む図書館検索では、第1巻、第2巻、第3巻1-4号はありません。

ゾルゲ事件特集の第3巻5号でさえ、国会図書館に1部のほかは、同志社大学と法政大学大原社会問題研究所にしかありません。しかし、英語で検索すると、なぜかアメリカの大学には、ミシガン大学、カリフォルニア大学などに日本語版そのものが入っています。

つまり、『現代史資料』のもとになった警視庁の『外事警察資料』とは、ゾルゲ事件の警察・裁判記録の復刻であるばかりでなく、もともと日米安保条約下の米国側の要請で、ソ連や中国に対抗する少人数の日米諜報部隊の共有すべき歴史知識として収集されたものであることが、みえてきました。

### ③ 戦後版『外事警察資料』はCIA 鹿地巨拉致軟禁事件から始まりラストボロフ事件も

実は私は、アメリカの国立公文書館で、1955年に創刊された『外事警察資料』第1巻1号が「三橋正雄に係る電波法違反事件」という、米軍に拉致されCIAに軟禁された鹿地巨事件についてのものであったことを発見しました。

第1巻2号が「関三次郎及P・K1403事件」という、ソ連の北海道での情報収集と日ソ漁業問題での漁船抑留事件についてのものだとまでは分かりましたが、それ以上は分かりません。第1巻3号は何か、第2巻では何が扱われていたかなどは、警察庁の外事公安警察の記録庫か、米国の公文書館・大学図書館の日本公安事件関係資料の中に埋もれている、と思われます。これはぜひ、若い研究者に突き止めてもらいたいと思います。

ただし、こうした日米諜報機関合作の公安警察資料が、その後も作られていくことは、別の形で分かりました。1969年4月に、1954年に東京で起きたソ連の諜報員ラストボロフの米国大使館への亡命事件がありましたが、そのラストボロフ事件捜査についての膨大な極秘資料集が作られていました。警視庁公安部外事第一課編『外事警察資料 ラストボロフ事件 総括』という本が、編集の仕方から装丁まで、ゾルゲ事件の『外事警察資料』第3巻5号とそっくりに作られています。

ラストボロフ事件の資料も「部外秘」になっていて、原本には全部「極秘」のハンコと少人数の配布者を特定するナンバーが付されていました。ただしこれも、後に古本屋に流れたのでしょう。ラストボロフ事件についての小説は、三好徹『小説ラストボロフ事件——赤い国からきたスパイ』（講談社、1971年）、檜山良昭『祖国をソ連に売った36人の日本人』（サンケイ出版、1982年）ほか何冊かあり、最近では稲村公房『詳説「ラストボロフ事件」——日本に

における最大級の諜報活動の実態』（彩流社、2023年）も出ていますが、それらはすべて、この1969年の『外事警察資料 ラストボロフ事件 総括』をタネ本にしているのです。

なお、米国国立公文書館（NARA）にはこの日本の警視庁公安資料のさらにもとになった、ラストボロフ自身や関係者の供述を含む英文第一次資料があります。京都大学の進藤翔太郎さんがこのNARA資料をも用いた研究を発表し始めています（進藤翔太郎「ラストボロフ事件——日本を舞台とした米ソ情報戦」筒井清忠編『昭和史講義 戦後編 上』ちくま新書、2019年所収、ほか）。

#### （4）1960年代『現代史資料』刊行とソ連でのゾルゲ名誉回復—大衆文化から歴史研究へ

##### ① ゾルゲ復権における岸恵子主演映画「スパイ・ゾルゲ 真珠湾前夜」の役割

1960年代に『現代史資料』1－3巻が刊行され、同時期にソ連でのゾルゲ名誉回復がつながって、大衆文化から歴史研究の対象になった、というのが今日の話の基調の一つです。

その経緯として、女優岸恵子さんの自伝『岸恵子自伝——卵を割らなければ、オムレツは食べられない』が、2021年に岩波書店から出ています。もとになったのは『日本経済新聞』の「私の履歴書」連載でした。そこに1961年の日仏合作映画「スパイ・ゾルゲ 真珠湾前夜」誕生のいきさつと制作・上映の裏話が出てきます。

それによると、1961年に欧州で封切られ評判になった映画は、いったんモスクワ国際映画祭出品が税関検閲で拒否されたが、時の在仏ソ連大使が直接クレムリンに持ち込み、クレムリンでの試写会を見て、フルシチョフ第一書記によるゾルゲの名誉回復、「ソ連邦英雄」称号授与につながった。ようやくソ連でも公開された映画は大ヒットし、岸恵子夫妻はフルシチョフの招待でソ連国内を旅することができた、とのことでした。

ただし、今回調べて分かったのですが、岸恵子自身は、あの映画は自分にとっては不本意なものだったと言っています。彼女は、ゾルゲよりも尾崎秀実の方に注目して、スパイ活動というよりも、日本の戦争についての情報をソ連に流すことで軍国主義・ファシズムに勝ったという、尾崎秀実『愛情はふる星のごとく』、黒沢明監督の映画「わが青春に悔なし」の流れの方で、ゾルゲ事件を理解していました。

彼女の言い分によれば、それを日本側の制作者、具体的に言うと映画制作の松竹とシナリオ作家が、主演女優である自分の企画意図とは反対のスパイ物語、反共メロドラマに仕立ててしまった。それも、ゾルゲは真珠湾攻撃の情報をモスクワに送ったという、ウィロビー報告以来通俗的に流布してきた陰謀論風デマに乗った、フィクション映画になっているのです。

##### ② なぜフルシチョフは、1964年にゾルゲをソ連邦英雄に仕立てたのか

しかし、なお疑問が残ります。1961年に欧州で封切られヒットした映画が、なぜ3年の空

白を経て、1964年のクレムリンの上映会まで問題にならなかったのでしょうか。

私たちの訳したマッシュズ『ゾルゲ伝』には、クレムリンでの映画会でのソ連共産党幹部たちの反応が描かれていました。フェシユンの編んだ2000年の資料集『秘録 ゾルゲ事件——発掘された未公開文書』（白井久也編『国際スパイ・ゾルゲの世界戦争と革命』社会評論社、2003年、所収）には、「1964年、ソ連軍参謀本部諜報総局で、A・F・カシーチンの指導のもとに、ゾルゲ事件に関する資料研究を目的とした委員会が創設された。ゾルゲとの仕事に関与したすべての人々が、回想記を作り上げた」と「名誉回復」に至る手続きと経緯が述べられています。

岸恵子さんによると、1964年に、もともと平和共存論者であったフルシチョフが、試写会でこれはいい映画だと言って、ゾルゲのことを調べろと言って調査委員会が作られ名誉が回復された。その直後の1964年10月にフルシチョフは失脚して第一書記（後に書記長）はブレジネフになってしまうのですが、フルシチョフの最後の仕事がゾルゲの名誉回復でした。

### ③ ゾルゲの名誉回復で東京からの発信情報もようやく一部公開

しかもゾルゲの実在が認められて名誉回復しただけではなく、ゾルゲのような活動が今こそ必要だと言って、ゾルゲを「大祖国戦争の英雄」、つまり第二次世界大戦で社会主義ソ連に勝利をもたらした英雄としてまつり上げました。当時のソ連ですから、たちまち勲章が授与され、銅像がいくつも作られ、ゾルゲの生まれ故郷のバクー（現在のアゼルバイジャンの首都）には記念公園が作られる。それからゾルゲに関する本も多数出るようになります。

それで初めて、ゾルゲが日本からソ連に送った電報の実際はこうだった、とゾルゲの日本軍南進情報送付など「功績」が発表されて、ようやく事実在即した研究ができるようになりました。

ロシアの研究者やジャーナリストからも、ゾルゲに関する書物が出てきました。イ・デメンエワほか『同志ゾルゲ 或る諜報部員の記録』（刀江書院、1965年）、マリヤ・コレスニコワ、ミハエル・コレスニコワ『リヒアルト・ゾルゲ 悲劇の諜報員』（朝日新聞社、1973年）、それに東ドイツのユリウス・マダーほか『ゾルゲ諜報秘録』（朝日新聞社、1867年）などです。

ただ、私が不思議に思ったのは、何で1961年に作った映画が、1964年までソ連国内で上映されなかったのだろうかということです。日本ではあまり売れなかった映画ですけれども、ヨーロッパでは結構ヒットしていた。これを追求して、もう一つの問題に突き当たりました。

### ④ ソ連宇宙飛行士ガガーリンの1962年来日が、ゾルゲ復権の糸口を作った

1962年2月に、当時のアメリカ大統領ジョン・F・ケネディの弟ロバート・ケネディ司法長官が来日します。5月－6月に、ソ連のユーリー・ガガーリンという、世界初の有人宇宙飛行士が来日します。このケネディ弟とガガーリンの来日という問題を調べていったら、ゾルゲ事件が出てきました。

どういふことかと言いますと、ガガーリンが来日した際に彼の世話をした在日ソ連大使館の通訳兼案内人だったロシア人イワノフが書いた回想が、1995年、つまりソ連崩壊後に出てきました。そこでは、来日したガガーリンが、日ソ友好のためにはゾルゲという戦前日本で活躍した諜報員がいたことをもっと大きく宣伝すべきだと考えて、帰国後にフルシチョフらに進言したそうです。

それによると、1956年鳩山内閣での日ソ国交回復時の日本側全権大使で、自民党の重鎮になっていた松本俊一が、1962年のガガーリン訪日歓迎委員会の中心にあり、戦時中に巢鴨の刑務所で処刑されたソ連のスパイ・ゾルゲの名前が、なぜソ連ではすっかり忘れられているのかとガガーリンに何度か質問したのに動かされて、ガガーリンはゾルゲの偉業を知り、フルシチョフに伝えると約束したといひます。

#### ⑤ 宇宙飛行士ガガーリンを呼んだ松本俊一らが「ゾルゲ名誉回復」の立役者に

つまり、60年安保の国論分裂の余韻は残っていましたが、日本側の宇宙飛行士ガガーリンの受け入れ団体は、超党派でした。1956年に日ソ国交が回復し、自民党系から共産党系まで、さまざまな日ソ友好団体ができていて、それらがまとまって世界初の宇宙飛行士ガガーリンを日本に招待しました。その中心にいたのは、自由民主党の、日ソ貿易・文化交流に熱心な国会議員たちでした。自由民主党の親ソ派に、1956年の日ソ国交回復時の全権大使だった松本俊一がいて、岸内閣時の内閣官房副長官も務めていました。

松本俊一と在日ソ連大使館員イワノフは、「この機会に、この諜報員ゾルゲの活躍と、ファシズムに対する勝利への多大な貢献について、最も詳細かつ鮮明に説明する」ことにしたそうです。ガガーリンは、この話に魅了され感動しました。宇宙飛行士ガガーリン来日の土産は、「反ファシズムの英雄ゾルゲ」を、日ソ友好の故事として復興することでした（ウェブ上の露語論文、ミハイル・イワノフ「ユーリー・ガガーリンとリヒアルト・ゾルゲ」『不思議と冒険』1995年1号、<http://www.cosmoworld.ru/spaceencyclopedia/gagarin/index.shtml?bl9.html>）。

この「ガガーリンの進言」がゾルゲの名誉回復で重要な役割を果たしたことは、『ロシア地政学選集』1998年3号のワシーリー・モロジャコフの論文でも取り上げられ、「ソ連でのゾルゲの公式承認の必要性をフルシチョフに語ったのは、日本旅行から戻ったユーリー・ガガーリンだった」が、1962年のフルシチョフは「時期尚早」と答えて、まず真相究明から始めたといひます（白井久也・小林峻一編『ゾルゲはなぜ死刑にされたのか』社会評論社、2000年）。

米国陸軍省のウィロビー報告が世界で読まれ、日本でもゾルゲ事件についての書物がいくつも出ていたのに、戦後のソ連政府は、ずっとゾルゲについて沈黙してきました。存在そのものを認めていなかったのです。そこに世界初の宇宙飛行士「地球は青かった」のガガーリンが日本に来て、彼を招待した日ソ親善交流の日本側関係者に会ってみると、何度もゾルゲについて



聞かれた。ゾルゲのことをゼヒフルシチョフ第一書記に伝えてくれというのが、日本側のガガーリン受け入れ委員会の意向だったというのは、ありうる話です。

事実、1962年のガガーリン来日は、日本で大変な歓迎を受けました。特に、早稲田大学大隈講堂での講演は、歓迎する学生ほかで満員になり、大歓迎を受けました。宇宙飛行さえ可能にしたソ連の科学技術発展がまだ輝いていて、アメリカと競い合っていると見られていました。

#### ⑥ 安保反対で立ち往生したロバート・ケネディとガガーリン来日の受けた大歓迎

ところが、その3ヵ月前に、アメリカのロバート・ケネディ司法長官と、当時赴任してまもない在日米国大使エドウィン・O・ライシャワー・ハーバード大学教授と一緒に早稲田に行った際は、大歓迎を受けたガガーリンとは逆で、学生たちから糾弾され、罵声を浴びました。日米安保条約改定が1960年で、安保闘争に参加した学生たち多数がまだ学内に残されていました。ロバート・ケネディ司法長官とライシャワー大使は、安保反対の反米学生に囲まれて、立ち往生してしまう事件が起きていました。

それが当時のニュース映画になっていて、新安保条約のもとで高度成長を始めた日本での情報戦、大衆的世論の取り合いを、米ソが競い合っていました。その大歓迎に気をよくして、ガガーリンと在日ソ連大使館は、米国以上に歓迎された凱旋の材料として、戦前ゾルゲの日本での諜報活動を日ソ友好に使えるという情報を、クレムリンに伝えたのです。

アメリカの方は、1960年代に、いわゆるケネディ＝ライシャワー路線で、後に日本史についての近代化論を使い広めるのですが、この段階では、むしろソ連型の唯物史観、マルクス主義史学の影響の方が圧倒的に強かったのです。

同じ頃に、みすず書房の『現代史資料』が出て、『歴史学研究』の書評論文で藤原彰さんのゾルゲ事件について学術的に研究しようという呼びかけがあり、日本でも「赤色スパイ事件」としてだけでなく、現代史の情報戦のテーマとしてゾルゲ事件に注目が集まるようになった。それが、ソ連におけるゾルゲ復権・名誉回復の背景になりました。

#### ⑦ キューバ危機後の米ソ情報戦がゾルゲ復権の背景にあった

もう一つ重要な背景があります。つまり、ロバート・ケネディが2月に来て、ガガーリンが5月に来日、7-8月に木下順二「オットーと呼ばれる日本人」初演。8月にみすず書房『現代史資料』第1巻が出た1962年の10月、キューバ・ミサイル危機が起こりました。これは世界史上の大きな出来事としてよく知られていますが、第三次世界大戦・核戦争の寸前までいった、東西冷戦時代の最も緊迫した米ソの核戦争危機でした。

キューバにソ連のミサイル基地ができそうだとすることで、アメリカ側が核のスイッチを押す寸前まで行って、最終的には、ケネディとフルシチョフの直通電話でのトップ会談で第三次

世界大戦が回避された、大変緊張した出来事です。

このキューバ危機を契機に、アメリカもソ連も、インテリジェンス、情報収集の重要性が、政治的にも軍事・外交的にも、決定的に重要になるのです。

この問題は、アメリカの場合は、有名なグレアム・アリソンの『決定の本質 キューバ・ミサイル危機の分析』という、1971年にまとめられた米国外交・国家安全保障の教科書的書物のベースになります（邦訳は中央公論社、1977年）。今でもハーバード大学のケネディ・スクール（行政大学院）では、行政学・国際政治のバイブル的な教科書になっています。

それは、ソ連の安全保障にとっても、間違いなく情報機関、KGBやGRUの役割が決定的に重要になる契機となりました。そこにガガーリンから、日本側のゾルゲ情報もたらされ、岸恵子のスパイ映画が入ってきて、それまで平和共存論でどちらかという西側でも歓迎されていたフルシチョフが、諜報・情報インテリジェンスを本格的に重視する政策に乗り出す。そうした時期に、リヒアルト・ゾルゲが、いわば象徴的に名誉回復したと思われま

#### ⑧ ゾルゲ名誉回復をテーマにした「オペラ・ゾルゲ」の辿った数奇な運命

1964年にゾルゲの名誉回復がされると、ソ連では軍歌「同志ゾルゲ」という行進曲が作られ、オペラ「蘇るリヒアルト・ゾルゲ」も作られました。このオペラの一部は、現在インターネットでカザフスタンのサイトで見ることができるのですが、ロシアでは見ることはできません。

なぜならば、ゾルゲの名誉回復時に、当時はまだソ連の一部であったカザフスタン出身の詩人と作曲家が、ソ連戦勝30周年を記念して、1975年に「リヒアルト・ゾルゲ」というオペラを作ったのです。このオペラは、1975年に作られて1980年まではソ連各地で上演されていたのですが、1980年に芸術の自由を求めたドイツ系作曲家オスカー・ゲイルフスが、東ドイツ経由で西ドイツに亡命してしまいます。つまり、表現の自由、芸術の自立を求めて、社会主義を捨てます。翌81年、西ドイツで不慮の交通事故で死亡します。KGBの暗殺ではと、ご遺族は今でも疑っています。

その後ソ連では、作曲家ゲイルフスの名前も、「オペラ・ゾルゲ」の存在そのものも、消されてしまいました。ソ連の音楽文化にこんな曲はなかったことにされてしまったのです。

この「オペラ・ゾルゲ」は、ずっと幻となっていたのですが、作曲ではなく作詞で台本を書いた詩人オルジャス・スレイマノフは、カザフスタンに留まっていました。カザフスタンは、ソ連がセミパラチンスク核実験場で470回も核実験を繰り返した地域で、ソ連崩壊で独立した今日でも、放射能に汚染された土地と「ヒバクシャ」多数が残されています。

そのオペラ「ゾルゲ」の台本を書いた詩人スレイマノフは、独立したカザフスタンで、ソ連時代も民族語を使い続けた国民詩人と慕われ、反核運動の指導者になりました（アケルケ・スルタノヴァ『核実験地に住む——カザフスタン・セミパラチンスクの現在』花伝社、2018年、

参照)。

ソ連が崩壊して、カザフスタンも独立国になったところで、その作詞したカザフスタン人の詩人スレイマノフの榮譽を称えるテレビ番組が作られ、「オペラ・ゾルゲ」が、40年ぶりでテレビで上演されることになりました。それを、亡命してドイツに移り住んだ作曲家オスカー・ゲイルフスの息子が知って、国際電話を通じてですが、劇的な再会をすることができました。ベルリン在住のゲイルフス・ジュニアの息子が日本人ピアニストと結婚しており、カザフスタンの国民詩人スレイマノフの反核運動に、広島留学経験のある私の教え子のカザフスタン女性が加わっていたことで実現した、幻のオペラの復元でした。

## (5) 日露歴史研究センターの功績

### ① 日露歴史研究センター渡部富哉の執念による伊藤律発覚端緒説の崩壊

『現代史資料』の刊行とソ連でのゾルゲの名誉回復後、学術的な意味でのゾルゲ事件研究は各国で行われてきました。日本では、1977 - 79年に『尾崎秀実著作集』全5巻(勁草書房)が刊行されました。

先にも触れた伊藤律が特高警察に対してゾルゲ事件発覚の端緒となる情報を漏らしたという「伊藤律発覚端緒説」は、伊藤律自身が1980年に中国の監獄から奇跡的に生還し、尾崎秀実と親しかった個人的関係は認めましたが、特高警察へゾルゲ事件についての情報を提供したという供述は、断固として否定しました。伊藤律の中国幽閉・獄中生活を余儀なくさせた日本共産党野坂参三らによる伊藤律査問、「スパイ」名目での党除名には、ゾルゲ事件との関わりも含まれていました。

伊藤律の「消息不明」は長かったので、死亡説もありましたし、あれこれの憶測も流れていました。1980年9月の生還自体が奇跡といわれ、大きく報じられました。日本共産党は、いわゆる「50年問題」で分裂した一方の側の行った問題で、公式には無関係としましたが、野坂参三などが迎え入れた妻子に大きな圧力を加えていたことが、後に明らかになります。

### ② 伊藤律の「奇跡の生還」と家族たちも含めた名誉回復

伊藤律の生還と膨大な聞き取り、『伊藤律回想録——北京幽閉二七年』(文藝春秋、1993年)刊行を受けて、渡部富哉の『偽りの烙印』(五月書房、1993年)など、日露歴史研究センターによる精力的な資料発掘と探求で、「伊藤律発覚端緒説」の誤りは劇的に証明されました。

これは、『東京新聞』2013年5月28日などマスコミでも大々的に報道されました。文藝春秋社が、松本清張『日本の黒い霧』の新装版の文庫版(2004年)に、「革命を売る男 伊藤律」に含まれていた事実誤認を認める断り書きを入れて、今日では完全に誤りと認められました。

ゾルゲ事件の「権威」となっていた尾崎秀実の義弟尾崎秀樹はこれを認めず、晩年まで「伊

藤律スパイ説」に固執しましたが、これも、最大の根拠とした川合貞吉証言の裏側での米軍との取引を私が『ゾルゲ事件』（平凡社新書、2013年）で明らかにしました。

ご遺族である伊藤淳さんが、『父・伊藤律 ある家族の「戦後」』（講談社、2016年）を書いて、無実であった伊藤律の無念ばかりでなく、中国で行方不明になった父の冤罪を信じて待ち続けた家族の苦難を描いて、ようやく伊藤家の「名誉回復」が完成しました。

## （6）独ソ開戦と日本御前会議南進情報の二大争点化

### ① 学術的歴史研究としてのゾルゲ事件の展開

米国陸軍省ウィロビー報告以来、ずっと問題になってきた、学問的意味でのゾルゲ事件の論点があります。大きな歴史的評価の問題としては、ゾルゲ、尾崎たちのグループがソ連に流した情報の中で何が重要だったか、第二次世界大戦の中でどんな意味を持ったのかです。

日本の2.26事件やノモンハン事件など、ゾルゲがソ連に送ったとされる情報はいろいろありますが、決定的なのは、1941年にゾルゲがソ連に送ったという二つの情報の意味です。

一つは、1941年6月の独ソ戦勃発について、その可能性といつ始まるかの情報です。それまで独ソは不可侵条約を結んでいたのに、突如としてヒトラーのドイツが、スターリンのソ連に侵攻します。その可能性についての情報を、東京のドイツ大使館や外国特派員たちから得て、ゾルゲは開戦前に幾度か警告を打電します。それでモスクワは、準備は足りなかったけれども、何とかドイツの侵攻に対して持ちこたえることができたのではないか、という話です。

二つ目は、7月・9月の御前会議など日本政府の中枢での機密軍事情報で、日中戦争中の日本軍が北に向かってロシアに侵攻する「北進」ではなく、南の東南アジア方面に向かう「南進」が選ばれたという情報を、ゾルゲがモスクワに伝えたので、スターリンは安心してシベリア戦線に置いていたソ連軍を西の方に振り向けて独ソ戦に充用し、それで第二次世界大戦の大祖国防衛戦争に勝利することができた、といわれてきました。

この二つ、つまり1941年の二つのゾルゲ情報の意味が、学問的にゾルゲ事件を考える場合の大きな争点だったのです。この点は、最新の研究に基づき、最後に触れます。

### ② 学術的ゾルゲ研究が世界で展開された

その他、学術的には、ゾルゲ事件の周りにいた人たちのいろんな証言や伝記も本になり、史実として再検討できるようになりました。日露歴史研究センターの主催した9回の国際ゾルゲ会議・シンポジウムは、各国からさまざまな領域の研究者・歴史家が加わって、この点での大きな交流機会を作りました。

宮城与徳やアグネス・スメドレーの詳しい伝記(野本一平『宮城与徳 移民青年画家の光と影』沖縄タイムス社、1997年、ジャニス・マッキンノン、スティーヴン・マッキンノン『アグネス・

スメドレー『炎の生涯』筑摩書房, 1993年)のほか, 最近では上海時代のゾルゲの助手ソーニャ=ハンブルガー夫人=ウルズラ・クチンスキーについても, ベン・マッキンタイアの『ソーニャ, ゾルゲが愛した工作員——愛人, 母親, 戦士にしてスパイ』が出ています。

中国からも, 楊国光『ゾルゲ, 上海ニ潜入ス——日本の大陸侵略と国際情報戦』(社会評論社, 2009年)以降, 上海での日露歴史研究センター主催ゾルゲ国際シンポジウムの中文記録である蘇智良編『左尔格在中国的秘密使命』(上海社会科学院出版社, 2014年)などが出ています。

その他, ブーケリッチや後妻の山崎淑子, 安田徳太郎など日本人被告についても, 翻訳も含めいろいろな本が出ていますが, 省略します。詳しくは, 私の平凡社新書『ゾルゲ事件』(2014年)と, 個人ホームページ「ネチズンカレッジ」<http://netizen.html.xdomain.jp/home.html>などをご参照ください。

#### 4. おわりに——新段階でのゾルゲ事件研究の論点と争点

##### (1) ゾルゲの1941年独ソ戦・南進情報——フェシユン『ゾルゲ・ファイル』の意義

###### ① 1941年6月独ソ戦についてのゾルゲ情報は信用されなかった

現段階で何が問題かという点, 一つは, みすず書房のフェシユン編『ゾルゲ・ファイル』(2022年)とマシューズ『ゾルゲ伝』(2023年)の刊行によって, ゾルゲの独ソ戦南進情報という, 長く学問的争点になっていた問題が, 決着がつけられたわけではないけれども, 研究方向が定められたという問題です。

フェシユンの資料集『ゾルゲ・ファイル』は, 世界的に見ても画期的で, ようやくゾルゲが上海や東京から実際にソ連に送った情報の全貌が, 掴めるようになったのです。

1941年6月の独ソ戦については, フェシユンの発掘した新資料によると, 結論的に言うと, ゾルゲは独ソ戦を警告した電報を10本以上モスクワに送ったけれども, スターリンは全然信用していなかった, したがって, かつて「功績」とされたような歴史的意味を持たなかったこととなります。

ゾルゲの独ソ戦開戦情報は, スターリンによって信用されなかったことが分かりました。当時ソ連の赤軍情報部GRUでは, ゾルゲは二重スパイではないかと疑われていたために, ゾルゲが必死で送った在日ドイツ大使館からの情報も役に立たなかった。

この点は, フェシユンの本ではなく, 大木毅さんのベストセラー『独ソ戦』(岩波新書, 2019年)の中でも, 言われている点です。当時のソ連には, 東京のゾルゲだけではなく, ナチス政権内部で活動するソ連諜報員を含め, 世界中から120本もの電報が「間もなくドイツがソ連に攻め込む」と伝え警告してきたけれども, スターリンは, 不可侵条約を結んだヒトラーを信頼し

ていて、結局海外からの諜報情報を認めず、ドイツが攻めてくるという情報を聞いたけれども信用しなかった、そのために不意打ちを食らって、少なくとも初戦は大敗北を喫したのです。

要するに、二大情報のうち、独ソ戦開戦情報についてのゾルゲの電報は、重要な役割を果たすどころか、むしろ「ドイツの二重スパイ」からの情報として疑われていたことが分かりました。

### ② 御前会議の南進情報はスターリンに届いたが、決定的ではなかった

しかし、ゾルゲに限らず、ドイツの「赤いオーケストラ」グループなどから当時モスクワに送られた独ソ戦開戦情報そのものはおおむね正しかったので、独ソ戦の当初の敗北は、スターリンの政治的・軍事的指導の誤りということになります。

その後、御前会議情報が送られて、日本はソ連に攻め込むのではなく、どうも南の方に向かうらしいという自分にとって好ましい情報には、スターリンは耳を傾け、それを認めたようです。ゾルゲの日本軍南進情報は、9月以降に高く評価されることが、フェシュンの発掘した電報から分かってきました。

ただし、それが直ちにソ連軍が最強のシベリア部隊を西部に移動させる決定に結びつき、ソ連の西部戦線での戦果につながったとする「ゾルゲ＝大祖国戦争の愛国的英雄」説は、ゾルゲの電報そのものからは、直接には証明できません。軍事史の専門家である大木毅さんなどは、シベリア部隊の移動はゾルゲ情報と直接関係なかったという扱いです。

つまり、ゾルゲの御前会議情報、日本南進情報についても、歴史的にそれほど大きな意味は認められない。むしろ敗勢だったソ連軍が何とか持ちこたえ、ドイツ軍に反撃して最終的に勝利できた歴史を、スターリン時代のソ連共産党の功績として賞揚するために、ゾルゲ情報が持ち出され、利用されたということのようです。現在プーチンが「大祖国戦争の英雄」とゾルゲを讃えているような意味では、決定的役割を果たしたわけではない。戦後に作られた「情報戦上の英雄」ということです。

### ③ 1941年の東京には、ゾルゲを含め6人のソ連諜報員がいた

それより恐らく、皆さんにとって衝撃的な事実は、1941年当時の東京には、6人ものゾルゲと同じようなソ連スパイがいたと、フェシュンの本に出てきます。

本名ではなく匿名もありますが、トップはグシェンコという武官、これは在日ソ連大使館にいました。在日ドイツ大使館では、ゾルゲはオット大使の顧問格で機密情報を得ていましたが、それとは別個に、恐らくゾルゲも知らないところで、イリアダという女性もスパイ活動を行っていました。その他に、イスバリン、イバ、イーラ、マロンなどというコードネームの諜報員が、日本から送られた電文資料中に出てくる。実は、当時の在日米国大使館にも、ユダヤ系のカルメンというソ連の女性諜報員がいました。アメリカ側の情報も、ゾルゲを経ないでもモス

クワに送られていたことが、ファッションの資料集から分かってきました。

そうすると、これまで我々が知っている「マスタースパイ・ゾルゲ」とは、当時のソ連の対日諜報活動全体の「象徴」であって、実際には、赤軍情報部 GRU だけではなく、内務人民委員部 NKVD (KGB) の系列を含め、ソ連スパイが少なくとも 6 人いて、スターリンへの忠誠を競い合っていたことになります。

#### ④ アイノ・クーシネン帰国後も、ソ連の別の女性諜報員がいた

これまでの日本の研究では、1934 年から 1937 年まで、アイノ・クーシネンという、コミンテルン極東部長で日本共産党の「32 年テーゼ」の作成など重要な役割を果たしたオットー・クーシネンのフィンランド人妻が、スウェーデンの貴族「エリザベート・ハンソン」と称して日本にやってきます。

ゾルゲは軍事情報中心なのですが、アイノ・クーシネンは皇族の情報を取っていました。皇室情報を求めて、秩父宮に直接会うことができたことは分かっています。彼女の回想『革命の墮天使たち——回想のスターリン時代』（坂内知子訳、平凡社、1992 年、原書は Aino Kuusinen, *Der Gott stürzt seine Engel: Memoiren 1917 - 1965*, Molden, 1982) も訳されています。彼女はコケティッシュな女性で、朝日新聞やジャパントイムズの当時の記者が彼女に取り入って、日本の重要情報の一部を漏らしていたのです。

アイノ・クーシネンは、1937 年末にモスクワからの指令で帰国し、そのまま「日本のスパイ」とされてラーゲリ（強制収容所）送りになりましたが、その後も、1941 年の時点でさえ、女性を含む 6 人ものソ連スパイがいたのです。アイノの帰国の時、ゾルゲも一緒に帰国命令を受け取っていて、ゾルゲはソ連で進行する赤軍粛清を秘かに知って、まだ日本で残された仕事があるという口実で帰国を断ったことが知られています。ゾルゲも 1937 年末に帰国していたら、間違いなく「日独三重スパイ」として粛清されていたでしょう。

ファッションの『ゾルゲ・ファイル』で分かったことは、たとえゾルゲがソ連に帰国し粛清されたとしても、代替スパイはさらに準備されていたということです。

#### ⑤ 受信した赤軍情報部にも、ゾルゲ信頼派と懐疑派の情報評価の分岐

ファッション『ゾルゲ・ファイル』が大変有益なのは、ゾルゲ諜報団が暗号無線などで送った情報がどのようなものであるかが分かったばかりでなく、それを受信した赤軍情報部 GRU の内部で、個々の情報がどう解読され、誰がその信憑性を判断し、スターリンなど書記局にまで送ることにしたかどうかが、それぞれの案件の電報について分かることです。

ほぼすべての電文について、暗号解読者、ロシア語翻訳者、送付先、記録簿記入先などが実務的ですが付されていて、時には「決済 第四部長へ これはしっかり調べる必要がある」「決

済 情報本部長代行 インソン [ゾルゲ] のすべての報告をもとに、特別報告を作成すること AP [パンフィーコフ] (文書 190, 1941 年 9 月 14 日) といった利用の仕方も書かれています。すべての電文に対してであるかどうかは確認できませんが、モスクワからの問合せや謝意の返電も収録されています。本格的検討はこれからですが、1941 年の日米交渉と日独・日ソ関係のつながりなど、今後の研究に大いに役立つでしょう。

端的に言って、モスクワで電報を受け取った赤軍情報部日本課内部にも、ゾルゲの情報を事実として信じるグループと、二重スパイ、アルコール中毒の人格破壊者とみて信用しない懐疑派がいたことが、見て取れます。その上部機関にあげるべきか否かの検閲——インテリジェンスでは「情報評価」と言います——をくぐって、信頼性が高いと認められた重要情報だけが、クレムリンの幹部たち、スターリンやモロトフまで届けられたのです。

#### ⑥ 頻繁にやりとりされる活動資金不足、5 人の中心人物中での手当の違い

それから、フェシュンの資料集『ゾルゲ・ファイル』で面白いのが、ゾルゲがモスクワに宛てて、スパイ活動・情報収集のために金がかかるので、至急送金してくれという電報が多い。反対に、モスクワからゾルゲに宛てた電報では、お前たちのこの情報は信頼できないから、今まで月に 3 千円渡していたところを 2 千円に減額する、といった「情報評価」の推移が分かります。その種の金銭をめぐる取引が、電報にあからさまに出てきます。

ゾルゲ諜報団は、確かに世界革命の使命・ソ連邦擁護を共通了解とした思想的組織で、金儲けのためのスパイ組織ではなかったのですが、それでも、情報収集や生活資金で苦勞していたことが分かります。ブーケリッチが離婚し日本人女性と結婚した際に前妻への慰謝料・口止め料が必要になる、尾崎秀実が高級料亭で要人を接待したり、宮城与徳に至っては画家では食べられないのに仲間から情報を集める際に必ずお金がかかる。そうした苦勞が、活動資金をめぐるやり取りから逆に分かります。

その交渉過程をみると、どうやらモスクワとしては、ゾルゲと尾崎秀実と無線技士マックス・クラウゼンが最重要でトップ・スリー、宮城与徳とブーケリッチは情報収集係で二の次という、諜報団の 5 人のメンバー中にも二重構造があったことが、電文の解析結果からみえてくる。これがフェシュンの資料集のメリットです。かつて「武士の家計簿」をベストセラーにした日本史学者がいましたが、誰かが真剣に取り組めば、「スパイの家計簿」がみえてくるかもしれません。

#### ⑦ マシューズ『ゾルゲ伝』からみえてくる、残された謎の数々

もう一つ、つい最近出た、英語の原題『An Impeccable Spy: Richard Sorge, Stalin's Master Agent (訳すると、非の打ちどころなきスパイ——リヒアルト・ゾルゲ、スターリンのマスター・



エージェント)』とうたったマシューズの邦訳『ゾルゲ伝』(みすず書房, 2023年)は、ファッションの2000年資料集とその後の資料公開やアレクセイエフの三部作など、ロシアでの21世紀の研究水準を踏まえているのですが、どちらかといえば、ゾルゲは偉大なマスター・スパイだったという、ある種の英雄伝になっています。この伝記だけ読むと、ファッションの電文そのもののクールな紹介とは違って、ゾルゲの情報がいかに独ソ戦に役立ったかという、かつての通説が甦ってきます。

例えば「1941年の夏、日本がソ連を攻撃すれば、スターリン政権は終わりを遂げ、第二次世界大戦の結末は全く変わったものになったであろう」と出てくるように、ゾルゲの送った独ソ戦・御前会議情報を高く評価しています。

これが何を意味しているかという点、国際的には、ゾルゲ情報が本当にどんな歴史的意味を持ったかという謎は、まだまだ解決していないということです。これからも論争が続くでしょう。

つまりゾルゲがモスクワに送った資料の解釈と、それが当時どのように受け止められ、本当にスターリンの政策に使われたかどうかは、学術的にはまだ未決で開かれた論点であることを、意味しています。

マシューズの本がそのようになる一つの理由として、ファッションは日本語を読めるのですが、マシューズは日本語がほとんど読めないために、ソ連崩壊後の日本の研究状況、例えば伊藤律の問題、川合貞吉や荒木光子の証言の信憑性の問題などについては、英語のウィロビー報告とブランゲ『ゾルゲ 東京を狙え』の収集資料を鵜呑みにしているところがあります。『現代史資料』の利用も、日本語のできる助手を使ったつまみ食いのようなものです。そのために、特に日本に関係する記述は、やや眉唾物が入っています。私たちは、訳者解説でその点を注意しておきました。

#### ⑧ 小松原道太郎のハニートラップによる1932年生物兵器情報漏洩

ただし、有益な注目点も多々あります。マシューズはオクスフォード大学出の歴史家で、祖父や大叔父がスターリン粛清の体験者で、前著『スターリンの子供たち——離別と粛清を乗り越えて』(山崎博康訳, 白水社, 2011年, 原書は *Stalin's Children: Three Generations of Love and War*, Bloomsbury, 2008) は28か国語に翻訳されたといいますから、スパイの人間性を描く力は優れています。ゾルゲや尾崎秀実についても、それぞれの局面での家族との関係での苦悩、友人関係の悩み、ソ連を中心とする世界革命と自国への帰属意識の矛盾やジレンマについて、心理描写を交えて描き出します。もともとロシア系英国人で、『ニューズウィーク』モスクワ支局長でしたから、ロシア語・英語の資料については大変目配りができています。

例えば、ノモンハン事件時の日本側総責任者であった第23師団長小松原道太郎中将がモス

クワの日本大使館勤務時にソ連側のハニートラップにかかって情報を漏らしていたという、在米日本人研究者黒宮広昭インディアナ大学教授の説を、ロシアの国防省中央文書館資料で検証しています。

それによると、小松原道太郎は、確かにモスクワの日本大使館駐在武官だった1927年にハニートラップにかかり1932年頃まで日本側情報を漏らしていたが、ハルビン特務機関長になった後は連絡を絶ち、1939のノモンハン事件時にはソ連との関係を絶っていた、と述べました。ノモンハン戦争での日本の敗北には、小松原情報は直接責任はないということです。

その代わりに、小松原がハルビン特務機関長であった1932年8月に、彼が発信したかどうかは確言できないが、「無名のエージェント」から「対ソ連兵器としての生物兵器の重要性に関する恐ろしい報告」が、東京参謀本部ロシア課長からの機密情報としてモスクワに伝えられ、「この報告は非常に憂慮すべきもので、トゥハチエフスキー元帥、スターリンは自ら読んだ」と述べています。これは、東京の陸軍軍医学校に、後の731部隊の原型となる石井四郎の防疫研究室が設置される時期と符合し、ソ連が日本の細菌戦計画をその初発の準備段階から知っていたことを意味し、731部隊研究にとっては衝撃的な事実です。

#### ⑨ クラウゼンの無線電信送付のサボタージュ、御前会議南進情報はどう扱われたか

また、ゾルゲ諜報団の中の無線技師マックス・クラウゼンが、諜報部員としての仕事をカモフラージュするために始めた青焼き複写機など販売のクラウゼン商会が軌道に乗り、ゾルゲ機関からの手当よりはるかに多くの収入を得ていました。もともと共産主義嫌いの妻アンナと共に、1940年頃にはスパイ活動から足を洗い、ビジネスマンになることも考えるようになりました。

やがて、ゾルゲから依頼された無線通信文の一部を勝手に廃棄したり省略したり、サボタージュを繰り返すようになりました。そのため、独ソ開戦と日米戦争前夜の最も肝心な時期に、ゾルゲと尾崎が決死の覚悟で集めた機密情報が、クラウゼンの暗号無線電文への翻訳サボタージュにより、そのままではモスクワに届かなかった場合があったといえます。

これは、第一次資料であるフェシュン『ゾルゲ・ファイル』を読む際にも気をつけるべき点です。モスクワの史料館で見つかり第一次資料とされた電文でも、実際にはゾルゲや尾崎の真意を十分に伝えていない場合があることを示唆しています。つまり、まだまだ謎だらけです。

## (2) 情報戦とインテリジェンス研究の対象としてのゾルゲ事件

### ① ゾルゲも尾崎秀実も、第一級のジャーナリストで知識人だった

最後に、ゾルゲ情報は当時の日本側が恐れたほどに本当に重要だったのかという根本的問題を、提起してみます。

尾崎＝ゾルゲ事件の全体像という意味では、ソ連側のゾルゲ情報があまり役に立たない場合があるという話をしましたが、その歴史的評価は、まだまだこれからです。

ゾルゲのスパイ情報以外の情報が、実際には沢山あります。彼は、ドイツの『フランクフルター・アルゲマイネ』という一流新聞、アメリカの『ニューヨーク・タイムズ』や日本なら強いて言えば『朝日新聞』でしょうか。いわゆるクオリティ・ペーパーの新聞記者として300通近い記事を送っていて、それは、今日でも当時の日本についてのヨーロッパ人の分析・評論としては極めて高い水準であったと評価されています。特に2.26事件の分析は有名です。スパイの秘密情報の方が先行したために、ジャーナリストや学者としての活動の検討がおろそかになっている。これは、やり直さなければならない。

尾崎秀実についても、同様です。彼の『朝日新聞』の記事や当時の雑誌に書いた中国問題についての評論は、西安事件の分析にみられたように、近衛内閣の囑託に採用されても誰も疑わない優れたものでした。尾崎についても、スパイ活動の方だけではなく、彼のアジア論・中国論を捉え直さなければならないのです。なぜアメリカでは、公式のウィロビー報告やプランゲの研究があるのに、チャルマーズ・ジョンソンのように、ゾルゲではなく尾崎秀実の中国論に注目する研究が出てきたのかを、考える必要があります。

この点では、ピッツバーグ大学のトーマス・ライマー教授ら米国の第一線の日本文学研究者たちが、ジョンソンの『ゾルゲ事件とは何か』を下敷きに、1962年に初演された木下順二の戯曲「オットーと呼ばれた日本人」に注目して英訳し、ちょうど戦後すぐの時期の尾崎秀実評価の分かれのように、改めてゾルゲ諜報団を「愛国者か売国奴か」「愛国者にして裏切り者か」という視点から問題にする論集を、2009年に出しています（J.Thomas Rimer ed., *Patriots and Traitors, Sorge and Ozaki: A Japanese Cultural Casebook*, MerwinAsia, 2009）。日本では国会図書館のほか、早稲田大学演劇博物館などごく少数数しか入っていないようですが、文学・芸術や思想史に関心のある方は、ぜひご参照ください。

私はこの木下順二の英訳者たちが、「オットーと呼ばれる日本人」＝尾崎秀実の「日本人であること」と「世界平和とソ連のための諜報」との狭間での苦悩を、原爆開発を指揮して戦後はマッカーシズムのもとで苦悩したロバート・オッペンハイマーと重ね合わせ比較していることに注目し、劇団民藝の公演パンフレットのインタビューにも答えておきました（「オットーと呼ばれる日本人」『民藝の仲間』429号、2024年5月）。

## ② インテリジェンスとしてのゾルゲ諜報団の活動

これらの全体を、私たちはインテリジェンス研究と呼んでいますが、スパイという狭い意味ばかりではなく、「インテリジェンス」、つまり知的な情報活動をみていく必要があります。

この点でいくと、戦前日本のインテリジェンスには、いろいろと問題があります。「スパイ」

に対するカウンター・インテリジェンス＝「防諜」に主に関係するのは、憲兵隊＝軍隊、内務省の特高警察、それからもう一つは司法省の思想検察です。この思想検察についての資料が最近でてきたことによって、新しくみえるところがでてきたということ、最後にお話しします。

日本陸軍憲兵隊とゾルゲ事件の関係は、ある意味明解です。憲兵隊は、国籍不明の怪しい電波が在日ドイツ大使館囑託ゾルゲの周辺から発せられているというところまでは掴んでいましたが、ドイツからきたナチス親衛隊の代理人で「ワルシャワの虐殺者」といわれたヨーゼフ・マイジンガーが「いやゾルゲは立派なナチ黨員でいい男だ、俺の酒飲み友達だ」と身元保証したので、ごまかされた。結局マイジンガーに妨害され、捜査には踏み込めなかった。そうしたら、特高警察が先に検挙してしまった。つまり、憲兵隊や憲兵隊出身の東条英機の系列は、ゾルゲを追っかけていたけれども逮捕には至らなかった、残念ながら警察に先を越されたという話が、『日本憲兵正史』（全国憲友会連合会、1976年、678-684頁）に悔しそうに書いてあります。

黒宮広昭教授の論文とマシューズの本に出てきた、小松原道太郎中将のハニートラップと軍機漏洩については、本格的な研究はこれからです。要するに、日本人にとっては恐ろしい憲兵隊の防諜活動・スパイ狩りも、当時の国際的なインテリジェンスの観点からみれば、隙だらけだったということなのです。

### （3）特高警察中心『現代史資料』と思想検察の『ゾルゲ事件史料集成：太田耐造関係文書』

#### ① 特高警察は治安維持法違反の共産主義者取り締まりから捜査を進めた

内務省特高警察中心のみすず書房『現代史資料』と、私が編纂した司法省思想検察の太田耐造文書（『ゾルゲ事件史料集成——太田耐造関係文書』全10巻、不二出版、2019年－2020年）の対比によって、新たに分かることがあります。この件については、数年前に早稲田大学・専修大学・明治大学などで幾度か講演し、『ゾルゲ事件史料集成——太田耐造関係文書』に詳しい解説文を書いて、インターネット上の「ネチズンカレッジ」に公開してありますので、簡単に済ませます。

端的に言えば、特高警察は共産党対策の1925年制定治安維持法違反で「共産主義者」を追いかけています。それが1928年の改定で、「国体」や私有財産を否定する共産黨員ばかりでなく、いわゆる目的遂行罪＝「目的遂行のためにする行為」にまで拡大し、自由主義者や宗教者、文化芸術活動にまで拡げ、死刑も可能になりました。

ただし、抗日独立運動も「共産主義」とみなされて治安維持法が適用され、2万6000人が検挙され50人ほどの死刑が執行された朝鮮半島は別ですが、日本国内での治安維持法違反では、日本共産党のトップを含め、死刑が適用された例はありません。日本国内約6万8000人の検挙者は、ほぼ1928－33年の前半期に集中しています。しかもその中の共産黨員は、わずか3.4パーセントでした。

ゾルゲ事件の関わる 1930 年代後半から日米開戦期は、もはや日本共産党は治安維持法違反の実際を中心対象ではなく、戦争に反対するすべての人々が目的遂行罪で「国賊」とされ、取り締まりの対象とされていたのです。

この辺の事情は、2018 年 8 月 18 日の NHK/ETV 特集「自由はこうして奪われた——治安維持法 10 万人の記録」に詳しく出てきました。NHK「ETV 特集」取材班著、荻野富士夫監修『証言 治安維持法——「検挙者 10 万人の記録」が明かす真実』（NHK 出版新書、2019 年）という本にもなっています。荻野さんは、『特高警察』（2012 年）『思想検事』（2000 年）の双方を岩波新書で出していますから、これも参照をお勧めします。

それに対して、思想検察は、特高警察の治安維持法による共産主義対策も指揮しますが、外国人もからむ国家機密漏洩を、死刑が容易に適用できる国防保安法違反、軍機保護法違反の重罪で追いかけていました。

特高警察は、1941 年 10 月に尾崎やゾルゲを捕まえた際に、当初は治安維持法違反で、コミンテルンや日本共産党とのつながりを「転向」強制的説得や拷問をも使って明らかにしようとしたのですが、訊問を重ねるうちに、外国大使館や政府要人・皇室関係も関わる可能性のある重大な国家機密漏洩事件であることが分かってきました。初めから報道統制が敷かれていて、主として宮城与徳とつながる元日本共産党員や米国共産党員は五月雨式に検挙できましたが、近衛秀麿前首相以下要人の取り調べには、なかなか進みません。

1941 年中は、12 月に日米戦争が始まったのに、共産主義者が捕まったことさえ報道されず、翌 1942 年 5 月 16 日の司法省発表まで、ゾルゲ事件は全く報道されなかったのです。

## ② 思想検察は御前会議の国家機密漏洩で死刑も可能な国防保安法違反適用へ

特高警察がゾルゲ・尾崎・クラウゼン・ブーケリッチ・宮城与徳の 5 人の中心人物を訊問していくと、特に特高外事課によるゾルゲの訊問と尾崎秀実の警察・検察訊問で、当初は想定されていなかった天皇列席の御前会議での国家機密情報漏洩がみえてきた。これは、とくに影響力をなくした日本共産党の残党の取り締まり以上に、厳しい国家的安全保障の問題です。

太田耐造関係文書の分析からは、思想検察が最も危険視して追いかけたのは、御前会議情報が漏れた国防保安法違反であったことがみえてきました。国体や私有財産を否定する共産主義者がいたかいなかったかという治安維持法の問題を、大きく越えていました。特に西園寺公一と犬養健という、皇室や日中戦争中の軍の権力に非常に近い人物から尾崎秀実に機密情報が漏れて、それがソ連側に伝わっていたことが重要で、深刻な国家危機であると考えたのです。

その根拠として、思想検察の太田耐造文書には、面白いことが書かれています。1942 年 1 月、尾崎、ゾルゲが検挙されて 3 ヶ月後ですが、尾崎がゾルゲに伝えた御前会議情報は、当初は朝日新聞社の田中慎次郎編集部長、つまり朝日新聞社内部の報道情報かと思われていたが、訊問

を重ねると、元老公爵家の西園寺公一から漏れていたことが分かってきた、これは大変だということで、西園寺と犬養は、治安維持法違反ではなく国防保安法違反容疑で、警察ではなく検察エリートが直接呼び出して訊問することにしました。特高警察には任せられないのです。

検察が、直接西園寺と犬養を1942年3月、4月に呼び出し、「御前会議など国策重要情報を漏らしただろう」と追及して、二人が友人と信じた尾崎秀実「情を知らず」重要情報を話したことを認めたため、これを国防保安法違反で検挙しました。

この国家機密漏洩問題は、昭和天皇に詳しく上奏されます。太田耐造文書の最大の功績は、『木戸幸一日記 下巻』（東京大学出版会、1966年、962頁）では示唆されていたが、みず書房の『現代史資料』には入っていなかったゾルゲ事件についての昭和天皇への「上奏文」（1941年5月13日）を保存していて、遺族から国会図書館に寄贈され、初めて公開したことです。その全文が、私の編集した不二出版『ゾルゲ事件史料集成』第8巻（2019年）に写真版で収録され、折から刊行中の『昭和天皇実録 第8』の昭和17年5月13日（東京書籍、2016年）によっても裏付けられたのです。

### ③ 西園寺公一・犬養健検挙を受けて、昭和天皇へソ連スパイについての「上奏文」作成

よくゾルゲ事件の本に逮捕者一覧表が挙げられていますけれども、西園寺公一と犬養健という当時の政界の大物二人の容疑は、ほかの多くの被告たちとは違って、実は、治安維持法違反ではないのです。国防保安法違反と軍機保護法違反のみが問題にされているのです。ですから、多くの共産主義者の関わったゾルゲ諜報団事件と、国家機密である御前会議情報漏洩事件は、相対的に区別されていたのです。

そして、1942年5月17日に戦前一度だけゾルゲ事件が新聞発表された際には、昭和天皇に「上奏文」として報告した内容と、司法省によって統制された新聞発表の内容が、全く別なのです。昭和天皇には捜査で知り得た事実をすべて報告しましたが、新聞発表は、報道統制され、重要事実の多くが隠されていました。むしろ「外国人をみたらスパイと疑え」という警告のためのプロパガンダ情報にされたのです。つまり、当初から情報戦だったのです。

当時外国人によるスパイ活動、「外諜」は、その人物が「親善国人」か「敵国人」かで、検挙や訊問の仕方も分けることになっていました。三国同盟のドイツ、イタリアのほかに、ソ連も中立条約を結んでいるために「親善国」とされていました。そのため司法省の公式報道では、ソ連を批判するわけにはいかない。ましてやゾルゲがドイツ大使館から情報を得たとはいえ、同盟国ドイツの批判をするわけにはいかないというジレンマがあり、それを隠蔽しごまかすために、全てをコミンテルン＝「国際諜報団」という共産主義者の仕業にして、国際共産主義が悪いという話にしました。

5人の主犯のみ諜報団員として名前を出し、西園寺公一・犬養健については、事情を知らな

かったことにします。ただし、天皇に対する「上奏文」では、これはソ連の赤軍のスパイ事件であると正しく伝えていたのです。

#### ④ 天皇への「上奏文」で最も警戒された、外国人スパイによる国策情報操作工作

それから、御前会議情報が漏れていたという天皇への「上奏文」報告では、彼らは情報を操作して、我々の軍隊を北ではなく南に向かわせようと、積極的に利用していた形跡がみえる、単なる情報収集（消極的諜報）ではなく、国策に影響を与えようとした積極的諜報工作＝謀略であると、昭和天皇には報告しています。

天皇にだけは真実を伝えるということになっていて、司法省発表の一般国民向け新聞報道には、「親善国」であるソ連という名前もドイツという国名も出てきません、5人以外の日本人被告名も、ドイツ大使館の内情も出てきません。尾崎に問われて情報を漏らした西園寺と犬養は、「情を知らずして」注意不足があったとされ、隣組や国防婦人会などを通じた対外防諜の宣伝材料に使われます。

昭和天皇への「上奏文」には、西園寺や犬養の役割についても、全部天皇には正直に伝えています。ソ連赤軍の諜報団であることも、ドイツ大使館や近衛内閣との関わりも、尾崎が内閣囑託で西園寺が外務省囑託であることも、率直に報告されています。この1942年5月13日の司法大臣による上奏があった事実については、『木戸幸一日記』『昭和天皇実録』の実務日誌にも出てきます。

#### ⑤ 事実を隠した1942年5月司法省発表と、「新聞記事掲載要綱」による報道統制

それで、司法大臣が天皇に報告した1942年5月13日の3日後、16日に、「国際諜報団」を起訴したとして記者会見を開き、翌日の新聞報道を許すのですが、その司法省発表の新聞報道が、またややこしいのです。「新聞記事掲載要綱」という文書が、私の編纂した不二出版『ゾルゲ事件史料集成』第8巻に入っています。

ソ連という名前を出してはいけないため、「国際諜報団」＝コミンテルンの陰謀ということにしました。天皇への「上奏文」では「近衛内閣囑託」とされていた尾崎秀実は「満鉄囑託」と公表されています。西園寺公一は「外務省囑託」だったのですが、外務省との関係は削られる。犬養健は、当時汪兆銘おうちようめい傀儡政権の顧問であり、日中関係で非常に重要な役割を果たしていましたが、単に「衆議院議員」という肩書です。

つまり、天皇には「上奏文」で取り調べの全容を伝えたいけれども、日米開戦直後で戦意が高揚している国民向けの広報では、真実は伝えず、対外防諜、外国のスパイに注意を促すというのが、当時のゾルゲ事件の司法省発表の狙いでした。

太田耐造文書に含まれていた「新聞記事掲載要綱」は、2018年8月18日付『毎日新聞』で

大きく取り上げられました。ゾルゲ事件を公表するのは1942年5月16日の司法省発表報道で各紙一回のみ、それは、新聞ではトップではなくサブ見出し以下、4段組み以下で、写真を入れてはいけません。ソ連、赤軍、ドイツ大使館などの名指しは全て禁止、5人の主犯と西園寺・犬養の名は出すが、北林トモヤスメドレーなどの名前は出てこない、などなど、新聞発表の仕方が、細かく指示してありました。それが、1942年5月17日のゾルゲ事件公表の新聞発表であり、戦時日本では、ただ一度の国民向け報道だったのです。

(2024年5月30日、講演者加筆・校閲)

## 質疑応答

### ゾルゲと親しかった高級軍人と、スターリンのゾルゲ情報への態度

〔問1〕 武藤章など陸軍高級軍人が絡んでいたため、憲兵隊はゾルゲに手を出せず警察の方にやらせていたと聞いたことがあるが、どうなのか。また、取り調べ当初、取り調べ側はゾルゲ事件に日本軍関係が絡んでいたことは全く把握していなかったのか。

〔加藤〕 それは事実です。ソ連が崩壊してすぐ後のNHK取材班の調査で、下斗米伸夫・NHK取材班『国際スパイ ゾルゲの真実』（角川文庫、1992年）が刊行されました。そこに収録された、松崎昭一さんの論文「ゾルゲと尾崎のはざま」に、詳しく書かれています。ただし、『現代史資料』収録の公式の捜査記録には出てきません。

1941年10月のゾルゲ逮捕の時は、ドイツ大使館の陸軍武官などを通じた日本の軍人との親密な交流は、まだ分かっていませんでした。1942年になって、軍人関係や西園寺・犬養らの御前会議情報漏洩など、被告たちの詳しい供述によって軍関係者もこんなに関係していたと分かった。しかし、戦時中で戦意にも影響しますから、高級軍人を起訴するわけにはいかなかった、特高警察・思想検察には高級軍人を追及する力はなく、隠蔽されました。

吉河光貞という当時のゾルゲの取り調べ担当検察官（戦後の公安調査庁長官）が、戦後1972年になって、『法曹』という検察庁の仲間内の雑誌に、ゾルゲ事件関係者の人的つながりの系統図に軍人関係を加え、ゾルゲに情報を流した可能性のある馬奈木敬信、武藤章、山縣有光、西郷従吾ら、親しかった親独派日本軍人の名前を明らかにしました。

〔問2〕 スターリンがゾルゲのことをどう思っていたのか知りたい。

〔加藤〕 スターリンは、ラムゼイというコードネームぐらいは知っていたでしょうが、ゾルゲがどんな人物なのかはほとんど知らない。ラムゼイという名前で日本からやってくる情



報について、1941年の相当遅い時期まで疑っていたと思われます。ただしそれは、スターリン個人が疑っていたというよりも、ゾルゲの電報を受け取る赤軍情報部（GRU）日本課員の中で、ゾルゲに対する評価が分かれていたためです。クレムリンのスターリン書記局まで上がる情報は、そんなに多くなかったようです。

情報部内では、ゾルゲの活動を評価し信用するグループと、ゾルゲは酒癖も女癖も悪くドイツ大使館に出入りして二重スパイなのではないかと疑う懐疑的グループとに分かれていたようです。そのために、スターリンのところにまで届く重要情報は、そう多くはなかったのです。

### ゾルゲ事件発覚の背景としての特高外事警察の米国共産党日本人監視・追跡

〔問3〕ゾルゲが逮捕された要因は、加藤先生のご著作で北林トモなどアメリカ共産党の情報から逮捕につながったということが書いてあったがどういうことか。

〔加藤〕米国共産党日本人部について、私はモスクワの旧ソ連秘密資料や米国国立公文書館の共産主義監視資料などを調べてきて、日本の特高警察がゾルゲを追いかけた有力な筋は、米国共産党日本人部出身の日本人・日系人の日本訪問・帰国だと分かりました。

まだまだ資料は少ないのですが、例えば鬼頭銀一<sup>きとう</sup>というアメリカ共産党員が、上海で尾崎秀実<sup>おしづみ</sup>に会ってゾルゲを紹介した、と私の本には尾崎の初期の供述に基づき書いています。一方ゾルゲは、日本の警察の尋問に対して、鬼頭なんて知らないと言い張っていました。そのため警察の公式報告・判決文では、ゾルゲの鬼頭否定供述に沿って、すべてスメドレーが尾崎とゾルゲを引き合わせたという話にされてしまいました。

しかし実際は、鬼頭銀一というアメリカ共産党の日本入党員が、コミンテルンから派遣されて上海で活動していました。この人物が尾崎とゾルゲを引き合わせたキーパーソンだったことは、旧ソ連秘密文書と米国国立公文書館文書の双方から、今日では明らかになっています。

しかも鬼頭銀一は、1925年に日本からアメリカに渡る直前に、外務省の語学要員として外交職員になる資格を得ていました。その後アメリカに渡って、彼はもともとキリスト教徒なのですが、デューク大学の社会学で貧しい人々へのキリスト教慈善事業を学ぶ中で、共産主義運動に近づく。米国共産党を指導していたコミンテルンの指令で上海に送られる。その関係の資料を、私は鬼頭家のご遺族からも得て、平凡社新書『ゾルゲ事件』に書きました。ご遺族の手元には、ゾルゲを訊問した吉河光貞検事からご遺族に宛てた手紙もあって、それを見ても、尾崎にゾルゲを引き合わせたのはスメドレーではなく鬼頭だと分かりました。

この鬼頭銀一が別件で上海領事館警察に捕まった事件などを契機に、1930年代初めか

ら、米国共産党員を含むアメリカ帰りの日本人・日系人の系統的監視が始まり、特高警察・思想検察がゾルゲ事件を追いかける中で最も重要なラインだったというのが、私の見解です。

それから、宮城与徳を米国共産党から日本に送り込んだ矢野勉という人物については、いろいろな記録に出てくるのですが、この人が何者かというのは今まで研究されていません。その米国カリフォルニア時代の名前が豊田令助、日本の戸籍名が<sup>まさつき</sup>将月令助だということが、新たに発見された米国側資料で分かりました。

矢野勉 = 豊田令助 = 将月令助を調べていくと、戦時中はアメリカ側の OSS（戦略情報局、戦後の CIA の前身）で、対日プロパガンダに携わっていました。米国共産党員として 1930 年代にゾルゲ事件に関与しましたが、1940 年代には連合国軍に協力してファシズムを倒す、日本軍国主義を倒すという方向での情報活動をやっていました。

その豊田令助が、戦後日本に帰ってきて、占領期の米軍高級幹部家庭用のカーペット販売と清掃を商売にしていました。そこから本名は矢野務でも豊田令助でもなく、実は佐渡出身の<sup>まさつき</sup>将月令助ということも、この数年でようやく分かってきました。これらはいま進藤翔太郎さんという若い研究者が追いかけていますが、私もその背景となる基礎資料と事実を「米国共産党日本人部研究序説」という長大な専門論文にしています（中部大学『アリーナ』第 20 号, 2017 年）。ウェブ上でも読めますので、ご参照ください (<http://netizen.html.xdomain.jp/arina20.pdf>)。

〔問 4〕 アメリカ共産党の中にも日本のスパイはいたのか。

〔加藤〕 サンフランシスコの日本領事館や FBI が、米国共産党カリフォルニア支部に日本人・日系人のスパイを送り込んで、共産党側から摘発された事例は、1930 年前後に数件あります。米国は移民の国ですから、共産党にはいろんな国出身のさまざまな言語圏の人がいます。端的に言って、モスクワのソ連共産党やコミンテルンにとっては、彼らが政治工作や謀略に必要な現地語ができる人材を世界中に派遣するためのプールが、米国共産党でした。アメリカ国内の政治や大統領選挙ではほとんど無視できるような役割しか果たしていないのですが、もう一つの「裏の顔」では、モスクワの必要に応じて、世界中に重要な人材を送り込んでいたのです。最大時米国共産党員は 10 万人、カリフォルニアの日本人・日系人は数百人を組織できましたが、ソ連が対日工作に使うために、都合のいい存在でした。アメリカからモスクワを経て、あるいは親族が日本に住んでいて里帰りという理由で直接に日本に派遣されたケースが、宮城与徳以外にも相当数あります。

## 情報戦とインテリジェンス、共産党員でない共産主義者こそ諜報には有益

〔問5〕歴史の真実と虚偽について、ゾルゲ事件を踏まえた加藤先生の見解を伺いたい。

〔加藤〕私は一橋大学では政治学の理論と国際関係、早稲田大学大学院の政治学ではインテリジェンスとネットワーク論を教えてきました。インテリジェンスは、どこの国でもやっていますが、ある事件が起こったその時点で、それは史実かどうかという歴史学的な問題とともに、それをどのように政治的に扱うかという情報戦が、重要な問題になります。今ロシアのプーチンが、ウクライナに侵略するにあたって、ゾルゲを「愛国者」に仕立てあげ、「大祖国戦争の英雄」として政治的に利用しているのは、典型的な一つの例です。

それに対するカウンター・インテリジェンス、防諜も、実は同じ構造を持っています。向こうがこう言っているから、こっちはこういう別の情報で対抗しようという情報戦は、常にやられています。そこには当然、フェイクニュースも入ってくる。

ゾルゲ事件に照らして言うと、1949年に米軍陸軍省ウィロビー報告が出たときに、当時アグネス・スメドレーは激しく抵抗して一部を撤回させ、議会の非米活動委員会への召喚を前に、イギリスへと出国しました。

彼女は米国籍ですが、若い時はインドの独立をめざして活動した共産主義者で、インド共産党の独立運動革命家と事実上の結婚をし、ドイツで暮らしていました。ソ連や中国の抗日運動も支援して、毛沢東の長征に同行し、朱徳将軍と親しくなりました。しかしスメドレーは、確かに中国共産党の抗日運動に関わっていたのですが、1949年の米国陸軍省報告に対して、「自分は一度も共産党員であったことはない」と反論します。これは、ある面で事実です。彼女は、モスクワのコミンテルン本部に登録された特別のインテリジェンス要員でしたが、米国共産党やインド共産党・ドイツ共産党・中国共産党に入党した記録はない。それでアメリカ陸軍省は、その部分を訂正せざるを得なかったのです。川合貞吉証言が米国にとって重要だったのは、この面での彼女の「非米活動」を証明するためでした。

その後、いろいろ調べてみると、各国共産党員ではない共産主義者は、いくらでもいます。ゾルゲは、もともとドイツ共産党からソ連共産党に転籍し、共産党の総本山コミンテルン本部からソ連赤軍情報部に活動の場を移し、日本では決して日本共産党員と付き合うなど、モスクワから明確に指示されていました。事実日本では、直接日本共産党関係者とは接触しない。尾崎秀実も日本共産党員ではなかった。

私の研究仲間で尊敬する先輩である日露歴史研究センターの渡部富哉さんは、尾崎秀実は立派な国際的反戦平和の活動をしたのだから、日本共産党員として敬うべきだ、学生時代から尾崎秀実は日本共産党員だったはずだと、日本共産党にも正式の申し入れて「証明」しようとしているのですが、私から言わせると、それはひいきの引き倒しで、無

益で無駄だと思われます。

尾崎秀実は、共産主義の理想を学び信じてはいたが、日本共産党員ではなかったからこそ、国家権力中枢に入り込み情報収集に役立った、それはソ連にとっても同じで、共産党員だから運動に役立つなどという発想は、インテリジェンスでは有害無益だというのが、私の理解です。今日の私の話の中の一つで言えば、ゾルゲ事件は共産党弾圧の治安維持法違反事件だとイメージされているけれども、日本の天皇制国家権力にとっては、これは国防保安法違反で御前会議の軍事機密が外国に漏れた方がはるかに重要だったからこそ、ゾルゲ・尾崎を死刑に処したのです。

日本共産党の方は、確かに治安維持法違反で何千人も検挙されたけれども、佐野学や徳田球一のような最高指導者に対しても、死刑の適用はできなかったのです。

〔問6〕 今後もゾルゲ関係の新資料が出てくる可能性はあるのか。

〔加藤〕 いっぱいあります。ロシアの国防省中央文書館でゾルゲ諜報団の通信連絡 600 通以上見つかったというのは画期的ですが、収集したフェッシュンも、まだあるだろうとっています。私も、ロシアの国立社会政治史文書館（旧マルクス・レーニン主義研究所図書館＝ルガスピ）でスターリンによる日本人粛清の資料を探したことがありますが、ロシアの資料館は、問題別でいろいろあります。それで軍事史の国防省中央文書館から赤軍情報部の 600 通以上の電報が出てきたとすれば、共産党関係資料はルガスピですから、ゾルゲがドイツ共産党員でローザ・ルクセンブルグ派だった時代の資料など、まだまだ出てくるはずですよ。

中国共産党と米共産党関係が重要だと言いましたが、ソ連共産党からもまだまだ出てくる可能性があります。日本共産党も、戦前の資料は全面公開して、ぜひ研究用に歴史情報を公開してほしい。伊藤律問題などは、歴史的に決着済みですが、肝心の加害者である日本共産党側の資料が出てきていません。イギリス共産党などは、ソ連崩壊時に解散して歴史的生涯を終えましたので、今日では膨大な党内資料が公開されて研究できるようになっています。

ゾルゲ事件には、元日本共産党員という人が、宮城与徳などの線で何人も関わっています。この人たちがゾルゲ事件でどのような役割を果たしたのかは、警察側の記録だけで、まだまだ解明されていない問題が多いのです。

〔問7〕 当時日本で大規模な諜報団が見つかったことを、英国など第三者はゾルゲ事件をどのようにみていたのか。

〔加藤〕 イギリスの対外諜報部である MI6 の記録は、イギリスの国立公文書館で私は調べまし

たが、残念ながらゾルゲ諜報団をイギリス諜報機関が監視していたという直接的記録は、上海時代以外、ありませんでした。ただし上海には当時イギリス租界がありました。イギリスの植民地であるインド人の警察官たちが、実は上海での各国租界の諜報活動を監視していました。そのため、イギリス警察が上海で調査した工部省記録があり、アメリカの国立公文書館やゲティスバーグ大学図書館にも所蔵されています。ゲティスバーグ大学は、G2 ウィロビーの出身校で、ウィロビーがゾルゲ事件資料の一部を私蔵していたものを寄贈していました。マッカーシズムの最盛期に、ウィロビーは、FBIのフーバー長官や反共のリチャード・ニクソン議員、封じ込め政策のジョージ・ケナンらと、手紙をやりとりしていました。ゾルゲ事件に関する資料を送り、アメリカでの赤狩りに役立つと売り込んでいました。

〔問8〕ゾルゲ電報がどのようにソ連政策に活用されたか関心がある。参考文献を教えてください。

〔加藤〕これについては、何度も紹介したみずす書房のアンドレイ・フェシュン『ゾルゲ・ファイル』を読んでいただくのが一番です。

#### 孫崎享『ゾルゲ事件の正体 日米開戦のスパイ』について

〔問9〕ゾルゲ事件が近衛内閣崩壊に影響を与えたという新しい見方があると聞いたが、その説について加藤先生のお考えを知りたい。

〔加藤〕その新説は、元外務省国際情報局長の孫崎享さんの説で、尾崎秀実の逮捕が公式発表の10月15日ではなく前日10月14日だという渡部富哉さんの提唱する説をとれば、第三次近衛内閣の総辞職が10月16日、そして10月18日がゾルゲの逮捕と東条内閣成立と一緒の時期になることに、ゾルゲ事件が決定的意味を持ったというのです。

孫崎説は、尾崎秀実という近衛内閣囑託が10月14日に逮捕されたという情報が近衛に入ったので、それで自分はもうだめだと思って内閣を投げ出したといっています。東条の方は、逆にその近衛の弱みを示す情報を握ったので、次は俺だとなって内閣を作ったというのです。つまり、第三次近衛内閣崩壊から東条内閣成立までに決定的な役割を果たしたのがゾルゲ事件だといっています。

これが『ゾルゲ事件の正体 日米開戦のスパイ』（祥伝社、2022年）という孫崎さんの本に、詳しく書かれています。しかし私は、孫崎さんと講演を一緒にしたこともありますが、失礼ながら、これは史実とは異なる、ある種の陰謀論だと思っています。ゾルゲ事件検挙と近衛内閣崩壊・東条内閣成立を直結させるジャーナリスティックな見方は、戦後すぐの森正蔵『旋風20年』（鱒書房、1945年）以来、繰り返し現れていますが、歴史的

に論証されていません。

どういう意味かという、近衛内閣崩壊・東条内閣発足の基本的な流れは、ゾルゲ事件の捜査とは関係なく、当時の日米交渉がどう進んでいたのかと、決定的に関わっていました。近衛がそれ以上米国との交渉を進められなくなって内閣を投げ出したというのが、日本の政治史・外交史、日米関係史・国際関係論の専門家の通説で、私もそう思います。

確かにゾルゲ事件の発覚は、その時期だけすれば一緒ですが、それはまだ、内務省・特高警察内部の問題で、せいぜい外謀事件として内偵されていた段階でした。近衛内閣崩壊とは、直接関係はなかった。だからこそ、近衛が日米交渉に行き詰まって政権を投げ出しても、すぐに東条英機に組閣がいったわけではない。東久邇宮の皇室内閣ができそうになるが、東久邇宮が拒否したのでやむをえず、いわば日米開戦に強硬な陸軍をなだめて天皇も希望する日米交渉を継続するために、敢えて火中の栗を拾い。東条英機にいったという流れがある。現代史研究では、これが通説になっている。

尾崎秀実の逮捕が、通説の10月15日ではなく、10月14日の検挙と拷問による自白供述があったということは、ありえないわけではないのですが、警察・検察・裁判所の公式記録も、尾崎自身の警察：検察訊問記録にも、10月15日逮捕になっています。前日10月14日に満鉄本社勤務の尾崎秀実と会ったという第三者の証言や記録もいくつかある。

何よりも、朝方に逮捕を見届けた尾崎英子夫人らご遺族も、松本慎一など尾崎の無実を信じて釈放を求め、戦時中に遺骨を引き取った友人たちも、尾崎秀実の検挙日については、10月15日朝で一致しています。尾崎秀実の娘婿で、著名な現代史家であった今井清一さんは2020年まで存命で、渡部富哉さんらの10月14日検挙説の存在を知り、質問状も受け取っていましたが、通説の10月15日朝逮捕を訂正することはありませんでした。

この点からしても、Wikipediaでは一部の項目で書かれ、渡部さんのほかに、孫崎享さん、太田尚樹さんらが書物で主張しているとはいえ、尾崎秀実10月14日逮捕説には、無理があると思います。

尾崎英子夫人は、1949年のウィロビー報告後に出た「おもいで」という文章で、「1941年10月15日は、よく晴れた日で、庭に白芙蓉の花が咲いていた。芙蓉の花の方に向いた書斎の縁に近く、秀実は本を読んでいた」、そこに「ドカドカと十数名の人が入ってきた」と細かい情景を鮮明に記録した文章を残しています。「逮捕された翌日」10月16日に、満鉄の同僚岸道三を訪れ、「15日は水曜日」で近衛首相側近の「朝飯会」の予定であったことも述べられています。

何よりも尾崎英子「おもいで」は、尾崎秀実とその獄中書簡を戦後に編集した親友・

松本慎一の死を悼んで、学生時代からの彼らの共通の友人たちが寄稿した堀江邑一・古由重編『偉大なる愛情——尾崎秀実・松本慎一の回想』（育成社弘道閣、1949年、6－9頁）の巻頭に置かれたものです。娘の揚子さんも、羽仁説子や中西功も寄稿していますが、米国陸軍省ウィロビー報告発表後であっても、川合貞吉や尾崎秀樹は入っていません。私は、この尾崎秀実・松本慎一追悼集『偉大なる愛情』を、第一級の尾崎秀実資料と認め、これに従います。

渡部富哉さんは、特高警察の治安維持法による共産主義者の検挙は、警察署に連行して拷問を加え自供させてから起訴するために10月14日連行・15日検挙ではないかとして警察資料も発掘していて、それは傾聴に値しますが、尾崎秀実が拷問によって自白したか否かは、今のところ決定的証拠がない。ましてや渡部説はあくまでも尾崎秀実の検挙日についてで、それに便乗して孫崎享さんが内閣交代への決定的影響を語ることの間には、大きな飛躍がある。近衛内閣崩壊・東条内閣成立問題は、尾崎・ゾルゲが捕まりそうだということではなく、やはり日米交渉の推移と見通しの問題、木戸幸一など昭和天皇周辺の見方が、決定的だったと思います。

私が先ほど、わざわざ憲兵隊は怪電波の正体が見つけられず、ナチスのマイジンガーにも妨害されてゾルゲの検挙に関われなかったという話をしたのも、実は憲兵隊あがりのトップである東条英機のところにどれだけゾルゲ事件情報が届いていたのだろうかに、疑問を持っていたからです。実際に検挙した特高警察ですら、尾崎秀実が近衛内閣囑託だったので国家機密漏洩の疑いを持ったにしても、それが御前会議情報漏洩として具体的に供述されるのは、2か月以上の訊問を経て、1942年になってからです。ましてや西園寺公一・犬養健の取り調べは、警察ではなく思想検察直轄で、1942年3月です。

そこで国防保安法違反が明確になり、1942年5月に大元帥である昭和天皇に「上奏」され、司法省発表での情報操作もなされることになりました。このプロセスで、内閣総理大臣東条英機には、逐次捜査情報は入ったでしょうが、少なくとも1941年10月中旬の段階で、尾崎やゾルゲの共産主義者の疑いはあったとしても、そんなに重視されていなかったであろうと思われます。むしろ、被告たちの取り調べが進んで、1942年から西園寺公一と犬養健も関与した御前会議など国家の最高機密漏洩が明確になり、国防保安法・軍機保護法違反で昭和天皇にも「上奏文」を書かざるをえなくなって、近衛も東条も、事件の本当の重大性に気付くのだと思われます。後の1945年2月「近衛上奏文」が作られる背景として重要です。

もう少し言うと、孫崎享さんの説を採ると、日米交渉失敗の当事者である外務省の責任は、内務省・司法省による尾崎・ゾルゲ逮捕でいわば希釈され、近衛文麿首相と天皇側近の木戸孝一らの責任が重視されます。ゾルゲ・尾崎追及の責任も、当事者は内務省

や司法省の警察・検察官僚で、日米交渉と東条軍部内閣登場の問題から、外務省は逃れることになります。つまり近衛の失政と軍部の介入で日米交渉は失敗し、開戦したことにできる。

しかし、1941年10月の尾崎・ゾルゲ検挙時は、まだ日米開戦の道が確定していたわけではありません。米国側の対応から絶望的であっても、何とか外交交渉の余地も残されていた。ですから軍部の圧力を抑えつつ、外務省は、天皇の意向でもある対米交渉を粘り強く進める使命があったはずで、少なくとも日本の国際関係史・日米関係史・近現代史研究の通説は、そういう方向でこの時期を理解しています。

ですから、うがった見方かもしれませんが、近衛内閣の倒壊から東条内閣の成立をゾルゲ事件のせいにする孫崎亨説は、どうも当時の外務省を免罪する陰謀論ではないかと思われまゝ。外務省は、孫崎さんの出身官庁です。確かに近衛自身も周辺の官僚・政治家もゾルゲ事件では事情聴取されますが、始めは尾崎秀実が共産主義とつながっていたかどうか最大の問題で、国家機密漏洩に関する本格的調査は1942年に入ってからのことでした。

〔問10〕ゾルゲ事件の初心者として最初に読むのにおすすめの本を教えてください。

〔加藤〕かつての大衆文化としてのスパイ物語の時代には、尾崎秀樹という尾崎秀実の義弟が書いた中公新書『ゾルゲ事件——尾崎秀実の理想と挫折』（1963年）がスタンダードになっていました。しかし、私はそれに異議を唱えて、加藤哲郎『ゾルゲ事件——覆された神話』という平凡社新書を2014年に出しました。こちらの本を見ていただければ、これまでの説がどれだけ間違っていたのかも分かるようになっていきます。できれば二つの新書を読み比べていただけると幸いです。

日本以外で書かれたものでは、私はチャルマーズ・ジョンソン『ゾルゲ事件は何か』（岩波現代文庫）をお勧めします。より本格的に全貌を掴むには、マシューズ『ゾルゲ伝』（みすず書房、2023年）や、フェシュン『ゾルゲ・ファイル』の「解説」を読んでいただく方がいいと思います。

古くて新しい「愛国者か売国奴・裏切り者か」は、「どんな国家か」の問題

〔問11〕プーチンはゾルゲのどのような思想に共鳴してKGBに入ったのか。

〔加藤〕彼は「愛国者ゾルゲ」と言います。けれどもこれは、よく考えるとおかしな話です。

ゾルゲはもともとソ連国籍ではなく、ドイツで共産党に入って、はじめはコミンテルン、ついで赤軍諜報部にリクルートされた人物です。本当はコミンテルンでマルクス・エンゲルスの研究をする理論幹部になるためにリクルートされたのに、その頭脳が役に立つ



ということで、ソ連赤軍の諜報員・スパイになるのです。国籍もソヴェト市民になり、ロシア人の妻と結婚します。第二次世界大戦でナチスの侵略を食い止め領土を守ったのを「大祖国戦争」というのですが、ソ連だけでナチス・ドイツを倒したわけではなく、英米仏とソ連が一緒になって、反ファシズムの連合軍として独日伊三国同盟に勝利したのです。

ましてや「労働者の祖国」とうたわれた社会主義ソ連を守ることと、共産主義崩壊・ソ連解体後のロシアを守ることとは、ゾルゲや尾崎秀実にとっても、全く異なる意味を持つでしょう。

ですからプーチンが一生懸命ゾルゲは「愛国者」だったと言っても、世界主義者・反ファシズムなのか、民族主義・宗教なのか、国家主義・国粋主義なのか、どういう意味の「愛国者」かが、問題となるわけです。外国人でもロシアに住んでいる以上は祖国ロシアのためにつくせという圧力になるのかもしれませんが、私は、これも噴飯ものだと思います。

決定的なのは、ゾルゲが名誉回復されたときは、反ファッショ戦争、ヒトラーのナチスを倒した連合国の対独戦争の英雄ということであって、だからこそ、1941年のゾルゲ情報の意味が重要だったのです。プーチンの現在は、大祖国戦争といっても、ソ連とか共産主義とは関係のない、異民族のロシアへの侵略を食い止めた愛国主義がゾルゲの功績だった、という国家主義的な話になっています。

〔問12〕ゾルゲはどのような方法で多量の情報をソ連に送信したのか。

〔加藤〕これは基本的に暗号電報、無線通信です。一部は文書やフィルムを上海経由でソ連軍の諜報網にのせたこともありましたが、それも暗号を使ってでした。

今日は詳しくは話せませんでした。フェッセンやマッシューズの本を見ていただければ、暗号電信系のマックス・クラウゼンが、日本では表向きの商売としてはじめた建築設計図などの青焼きコピー機械販売の商売がうまくいって、本来の任務であるソ連への暗号通信がおろそかになった話が出てきます。

モスクワから彼らのグループ全体に送られてくる活動資金が月2千円ぐらいのときに、マックス・クラウゼンは商売で3千円も稼いでいるのです。そうすると、ソ連の諜報のためにカバーとしてビジネスをやってきたが、妻のアンナが共産主義嫌いなこともあって、もうどうでもよくなって来る。逮捕される前の一年半は「ゾルゲから渡されたものの半分しかモスクワに伝えていない」というのです（フェッセン『ゾルゲ・ファイル』375ページ）。ですから肝心の1941年にゾルゲが書いた暗号電信情報の多くは、クラウゼンのサボタージュによって、勝手に破棄されたり省略されたりしていました。

それでも全部で650通もあったのだから立派なものです。ゾルゲ自身は、恐らくもっとたくさん、詳しい情報を送ったつもりだったのでしょう。実際にモスクワに届いていたのは、そのうちのごく一部だったという真相が、ファッション編『ゾルゲ・ファイル』の明らかにした、ゾルゲにとっては悲しい歴史の真実です。

〔注〕

- (1) 2022年12月3日（土）当館主催で開催した第13回企画展講演会①「ゾルゲ事件を通じて見えてくる近衛体制の弱体化と東条体制の強化」。
- (2) 注（1）に同じ

〔追記〕

本稿は、2023年5月13日（土）に対面及びオンラインのハイブリッド方式で開催された第13回企画展講演会②「ゾルゲ事件についての最新の研究状況」（主催：明治大学平和教育登戸研究所資料館，後援：尾崎＝ゾルゲ研究会）の内容をもとに加筆・修正したものです。音声付きの映像報告は、すでに発表されているため、本稿では文献・資料などでさらに手を加え、学術論文風に加筆・修正されています。